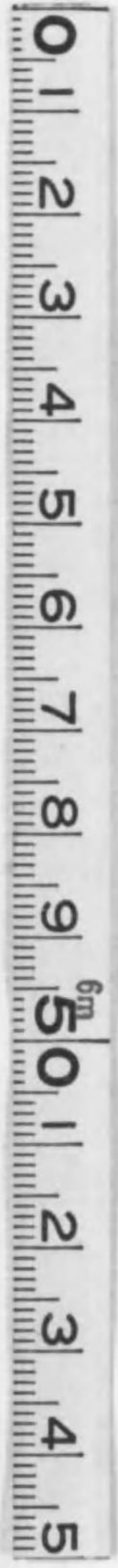


特 258

626

淳法堅學子講演集

(第一輯)

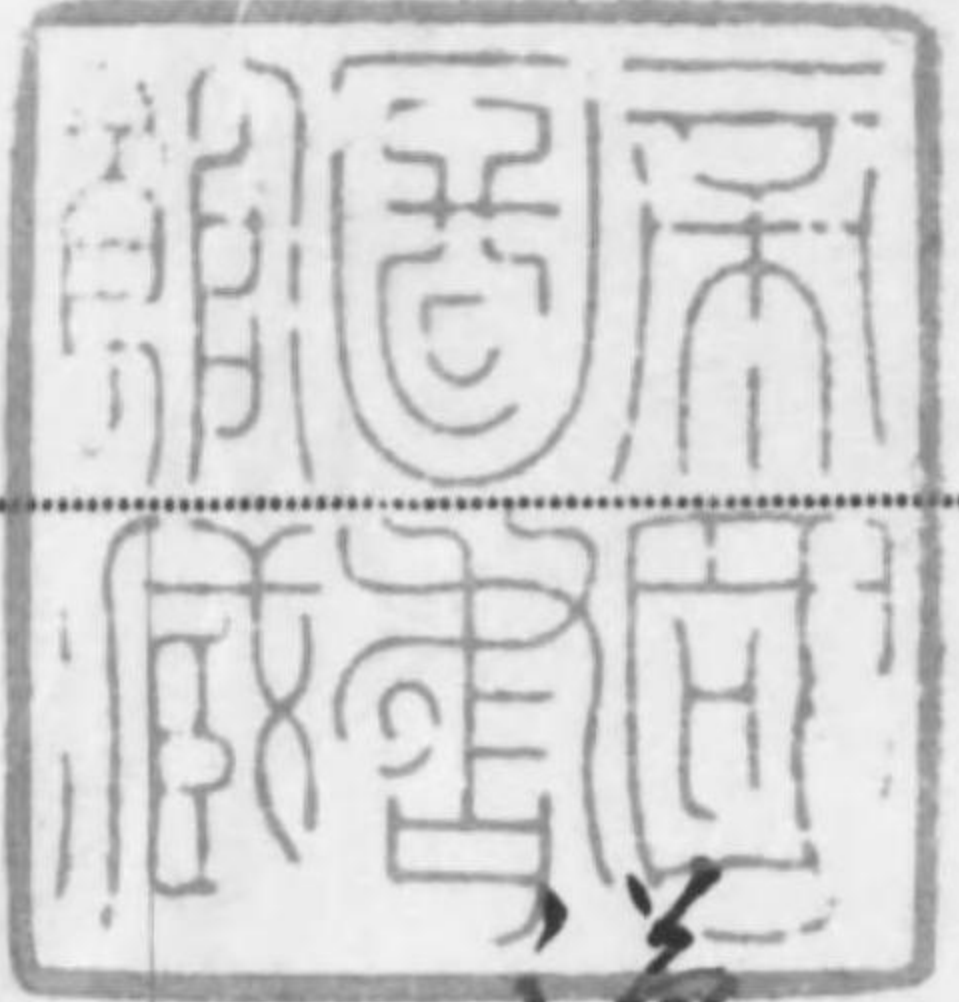


始





特258  
626



漢法醫學講義集 (第一輯)

醫學博士森田之皓氏口述

漢方研究會編

基本方劑に據る説明——之卷







漢法醫學講演集 (第一輯) 基本方劑に據る説明 (壹之卷) 目次

基本方劑に據る説明 (壹之卷) 目次



# 漢法醫學講演集 (第一輯)

## 基本方劑に據る説明 (壹之卷) 目次

醫學博士 森田幸門氏講話

各	緒	言	.....	(二)
	論	.....	(三)	(三)
(一)	四君子湯	.....	(三)	(一)
(二)	六君子湯	.....	(二)	(二)
(三)	四物湯	.....	(一)	(五)
(四)	八物湯	.....	(一)	(九)
(五)	十全大補湯	.....	(二)	(〇)
(六)	補中益氣湯	.....	(二)	(四)
(七)	六味丸	.....	(三)	(四)
(八)	八味丸	.....	(三)	(八)
[附]	補腎丸	.....	(四)	(一)
[附]	滋陰大補丸	.....	(四)	(三)
[附]	十補丸	.....	(四)	(三)



(九)	調中益氣湯	.....	(四三)
(十)	升陽順氣湯	.....	(四五)
(十一)	升陽益胃湯	.....	(四六)
(十二)	人參養榮湯	.....	(四七)
(十三)	參朮調中湯	.....	(四九)
(十四)	參苓白朮湯	.....	(四九)
(十五)	百合固金湯	.....	(五〇)
(十六)	紫菀	.....	(五二)
(十七)	清咳湯	.....	(五二)
(十八)	補肺湯	.....	(五三)
(十九)	秦艽扶羸湯	.....	(五四)
(二十)	小柴胡湯	.....	(五五)
(廿一)	大柴胡湯	.....	(六二)
(廿二)	大承氣湯	.....	(六五)
(廿三)	小承氣湯	.....	(六七)
(廿四)	桃核承氣湯	.....	(六八)
(廿五)	調胃承氣湯	.....	(七〇)
.....			以上

# 漢法醫學講演集 (第一輯)

基本方針に據る説明 壹之卷

漢法醫學研究 木曜會編

洋醫の發達に危くもその影を没し様として居た漢醫方が西洋醫學に嫌きたらぬ人々の間に俄然再認識の狼火が擧げられて來た。

悠久五千年、神農の昔より治療醫學の根本觀念を逸脱することなく、東洋哲學の神髓をも籠めて今日に到る漢法が、更に又現非常時局下代用藥としての和漢藥が重視されつゝある時、その再検討を叫ぶるゝのも決して偶然ではない。

田口 御繰り合せ願ひまして毎月一回づゝ引き續き一年の豫定で漢法醫學に對する先づ大體のそして實際的のお話しを願ひます。大分虫のよい話しであります。

今回は概論といふものをお願致しましたが、實際の話その中へ概論を織込んで行つた方が反つてよく分るだらうといふ話しであります。そうして頂けば大變結構でありますといふ事でお祈願ひしました。十分お聴きとり願ひまして約一時間半ばかりお話し願つて休憩します。

その後で今晚の話しを懇談的に質問して頂きまして、それによる皆さんの御質問なり御答へを願ひました事を、それだけ特にプリントを作りまして聴講の皆さん方にお配り致します。

それではこれから御講演を願ひます。



緒言

只今御紹介の森田幸門であります。此の間田口さんが御出でになつて何かお話しをせんかといふ事で引受けましたところ、私は今までか様な話しはした事がないし、どういふ事からお話していかと實は迷つて居ります。

そうしたところがこの間社告を見ますと、大變大きくいふ工合に書かれては誠に穴に入りたい氣持がして居ります私が漢方を始めましてから、これで十年位しかありません。兎に角現在日本では漢法醫學の完全な教育機関がありません。

最初は皆様が御承知の中野先生に手引して頂きました、臨牀を見學する傍ら三、四年先生のお手傳をしたに過ぎないので特別にこれと言つて系統だつた教育は受けて居ないので、當時も支那あたりへ行つて、支那の漢法醫學校へでも入學して見たい希望はありましたがこれも自分の色んな事情や家庭の都合で遂にそういふ機會を恵まれないで今日までやつて来ましたので、系統だつた教育を受けて居りません、だから今尙矢張修行中のものであつて到底皆さんの前で、大きい顔をして漢法のお話しをする事は私として内心大いに慚愧たるも

のがあります。皆さんの内には私より前から漢法に對して興味を持ち研究しておいでの方もあり却つて私の方がこゝで勉強させて頂くことになるのですが、大體私が日常臨牀に従事して居るといふ事でもつて、私を中心としてかういふ會合をして頂きその機會を利用致しまして皆さんと共にこの機會に於て漢法の研究を進めて行けば大變結構と存じます。こんな風で田口さんのお需めに應じたものであります。

それから私が一通りお話し致しますけれどその足りない處は皆さんに教へて頂き、討論し合つてお互に知識を深めて行くといふ方針でやつて行きたいと思つて居ります、だから私の足りない處は皆さんはご遠慮なく御教示願ひます。

それで今お話しにあつた通り漢法の概論的方面、漢法の診斷學、藥物學、そういふものから始めて行くのが本當であります、廻りくどくなり實地要らない事に入りますから早速皆さんに處方の話しをしそれに關聯した診斷法の概論をいつたそういふものを挾しはさんで行きたいと思つて居ります。それで最初は極く基本的の藥、四君子湯から始めたいと思ひます。

各論

(一) 四君子湯 (シクンシタウ)

處方

四君子湯は此處に書いてあります通り

人參<sup>アツマ</sup> 茯苓<sup>フクク</sup> 甘草<sup>カンサウ</sup> 朮<sup>ジツ</sup>

この四つの藥味からなつて居りますが、これは和劑局方に載つて居ります處方でありませぬ。

これは誰れが作つたのであるか、其處のところはつきり致しません、多分金匱要略配載の人參湯といふものがあります人參湯は人參と蒼朮 乾姜 甘草 この四つでこれが人參湯といひます。

これを加減して出来たものか或は理中湯、それは人參に白朮 乾姜 甘草の藥味からなつて居ります。それから出来て来たものと言はれて居る處方でありませぬこれは局方にはかういふ風に書いてあります。

主治効能

榮衛の氣虛し 臟腑怯弱 心腹脹滿 全く食を思はず 腸鳴 泄瀉 嘔噦 吐逆するを治す

かういふ風に出て居ります。人參 茯苓 白朮 甘草の四味を粉末としてその二匁を水一盞で七分に煎じ一口に服し盡すのであります、それに炒つた鹽を少し許り點じるのであります。

榮衛の氣：漢方醫學に於ける氣及血とは

この主治効能中にあります榮衛の氣榮衛といふ事は今日の醫學から考えますとどういふ事であるか大變分りにくい事でありませぬ。

一體吾々人間の身體を考へて見ますと、無形的精神的部分と有形的肉體的部分の二つにわけることが出来ます、これはどの生物にも共通の現象であります。兎に角無形の精神的作用と有形の肉體の二つにわけることが出来ますこの無形の精神作用を漢方では氣といふて居ります。それから有形たる物質的のものを血といふて居ります。

即ち氣といふのは精神的、神經的働きをいふのであります血といふのは血液、其他唾液、消化液の様な外分泌液、それから今やかましい内分泌液、即ちホルモンとを總稱したものであります。



といへるでせう、けれどもこの様な分ち方はあまりピッタリと来ないのであります。

現今の科學的な獨逸流の現代醫學で説明しやうとしてもピッタリあてはまらないのはあります。まあ、その言つたものと考へて好いかと思ふのであります。

氣といふのはどういふ處から出て来ますかと申しますと精神であります。今、嚴密にいひますと先天的な作用を現はす時にいふ言葉で、例へばお腹の中に子供が居る時、胎育といひますが氣は親の精神から出て来ます。

それから血は何處からかといひますと精液から出来てくると考へられたのであります。昔は精液で血が出来て来たかと考へてみました。本によつては精神と書いてその精は精神の精ではなく精液の精で、神は精神の神を意味したのであります。だから精神と書いてあつても現今使用されてゐる意味の精神でなく、精液と精神との二つの意味を含んでゐたのであります。

先天的には精液から血が出来、精神から氣が出来てそれから後天的の意味に使用しますとつまり氣が即ち衛であり、血が即ち榮であります。

衛といふ字は「毛」といふ意味で、榮は營業の營でイトナミてあります。「衛」は外を衛する「榮」は内を營む。榮は血液其他唾液なり、消化液なりのそういう外分泌液、及び内分

泌液即ちホルモンの如きものであつて、身體の機能を營むものであります。

「衛」は外側より守る、つまり神経作用で身體の機能を調節してゆくものであります。「榮」は脈内を「衛」は脈外を行くとかういふ風によく本に書いてあります。

衛は外を廻る血管外を廻らず走つて居る。

榮といふのは血管の中を通つてゆく今の醫學では血液、體液、或は消化液或はホルモンとさういふものに相當します。こちらの「衛」は精神、神経作用とかういふ風に解すれば好いのであります。そうしますと此處で榮衛の氣といひますのは所謂血液或は淋巴液、消化液或はホルモンなどの働き即ち機能と、それから精神的な機能と解さねばならぬのであります。

この氣といふのは矢張り機能であります、こちらの榮氣と言へば肉體の機能になります、衛氣と言へばつまり精神或は神經の働きとかういふ風に解します、だから榮衛の氣虚すといへば要するに肉體の働きも精神の働きも共に共にくし衰へてゐることでありませう。

榮衛の氣が衰へれば勿論臟腑も虚弱なのは當然であります

五臟には精神が宿る漢方醫學の

五臟六腑と現代醫學との比較

臟腑といふのは御承知の通り肺臟、肝臟、腎臟、心臟、脾

臟この五つを五臟といひます。臟は所謂藏であつて、藏といふのは藏へば出さない處をいひます、出口のない處を藏といひます。

昔支那では五臟に精神の働きを結びつけ様と考へまして、肺臟には魂、肝臟にも魂が宿つて居ります。脾臟には意志が宿つて居ります。腎臟には志が宿つてゐます。心臟には精神が宿つてゐます。

精神の働きは五臟の働きに密接な關係があるものと考へましてかういふ關係が記載されてゐます。それで例へば肝臟の大きいものは膽玉が太い、クヨクヨしない。

吾々が食物を喰へますとき蛋白質は肝臟で色々な分解されます、その時肝臟の中で行はれる新陳代謝は肝臟が大きいと樂にいけます。所謂中間新陳代謝産物といふものは出来ない完全に蛋白質からアミノ酸になつてしまふが肝臟の働が完全でないとき蛋白質が分解されてアミノ酸にならないで身體に有害な有機酸が肝臟内で出来る、そしてその有機酸が血液中に這入りますと血液は酸性になつて精神を亢奮させ易くなる、即ち所謂肝癩が立ちました小さい事にクヨクヨし仕事に對して因循になつて、その人の性格がイラ／＼した人格になり詰らぬ事を氣にする、所謂膽大であるといふ大人物になれない、そういうふ事は現代の醫學からも證明されてゐます。昔の人は

巧く言つてゐます。「肝は刺に通ず」と、即ち肝が悪いと癩瘡が出来ます。又、甘いものを澤山たべると癩瘡が立ちやすくなります、含水炭素はグリコーゲンとして肝臟内に貯溜されないので血液中に入つて血液が酸性になつてそのために矢張り精神が亢奮しやすく疲勞しやすくなる、即ち疝が立つやうになる、そして遂には種んな疾病の原因となる、かやうに肝臟と精神の働きの間に一定の關係があります。さういふ處へ支那の人は古くから目をつけて居つたのであります。

支那醫學の特徴は細かく分けるといふ事をしないで人間そのものを一單位として物質的なものと精神的なものとの關係研究しやうとして心臟には精神が宿つてゐるといふ風に考へたのは大變に面白い考方であるといへます。

腑といふのはこれは庫であります。これは一度貯めても又間もなく運び出す庫であります、つまり倉庫といふ事でありませう。

倉庫は恰度荷を二日三日をいて又翌日は取出してしまふ、だから胃、小腸大腸、膀胱、膽囊、三焦これが六腑であります。

五臟六腑、五臟五腑といふ人もありますが、六つで其中胃は水穀を消化するところでありませう。

小腸は水穀を傳輸するところである大腸は糟粕の腑である大腸は傳輸された水穀の水分をなくして硬める所である。



即ち水穀を淨化するところである。

膽は清淨の部である。

三焦は水穀の道路の腑である、膀胱は水液の腑といつて水分の代謝と關係があるといつてみました、他の五腑は何れも現代醫學の説明からみても不思議に感じないのですが、三焦だけは一寸現代の醫學とかけ離れて居ります。

この三焦といふものは普通上焦、中焦、下焦、かういふ風に分けまして上焦には宗氣あつまり、中焦には榮氣、下焦には衛氣が生ずるといはれて居ります。

宗氣はどういふものであるかと申せば昔の事ですから全然いまの頭を離れて考えて頂きます——一體、人體の生理現象の中で呼吸作用が一番目につく殊に原始人には呼吸作用によつて生死を判断した位に第一に目につく生理現象でありますその呼吸作用を營む根原的の力を宗氣と申したのであります人體の生理作用の中呼吸作用が一番著明であり根元的な作用であると考えまして宗氣といつたのであります。この宗氣、榮氣、衛氣を岡本一抱子、この人は有名な劇作家の近松文左衛門の弟でありますが大變に功妙に譬へて云つて居ります。

たとへば御飯をたくとき水と米とを釜に入れて加熱するとき湯氣が初めて煙のやうになつてみへるのは宗氣であつて、米が將に熟せんとする頃になつて釜の中から蒸發する水蒸氣は釜の蓋の裏に聚つて露となる、この露は即ち榮であります

ホルモンの分泌の多い人は頭も明瞭であります。

性ホルモンの分泌が生命力に次ぐ第二の力であると考へたのも無理からぬことであり、それでこれは君王に對する宰相つづく大切な力であるといふので相火と命名したのであります。相火は活動的なものであるから進歩すると燃へ上る性質を有してゐるが腎水即ち今でいふ血液や血液が充分あつて身體の營養が完全であればデット沈靜してゐるが一度病氣にかゝつて腎水が枯れる即ち身體の營養が衰へると火となつて燃へ上る力を持つてゐるのであります。かやうに活動的で燃へ上らうとして居るものだから宰相の相に火をつけて相火と稱したのである。上述の通り相火は兩方の腎臟の間に宿つて居ると考へて居つた。

この相火の力に依つてこの宗氣、衛氣、榮氣が活動してゆくものと考へられてゐた。今の科學から見れば可笑しいですが活きたものを活きたまゝ捉へやうと苦心したためにかやうな考へ方をしたのであります。

その時分の人は性ホルモンの分泌を重要視してその力によつて宗氣が活動し衛氣、榮氣が運轉すると考へて居つた、宗氣は軀幹の上部、榮氣は中部、衛氣は下部から萌して來ます焦といふのは焦蒸蘆焦の焦でありまして相火が一身に充滿して至らない所なく周身に焦蒸蘆焦して宗、衛、榮の三氣を運行させそれによつて體温を生じ消化機能を通り精液や精神

六

更にもはや飯の熟する頃には水が殆んど盡きるやうになつたとき昇る湯氣は釜の蓋を反つて乾燥させる、この乾燥させる力のある湯氣は即ち衛であるといふのであります。吾々の喰つた食物が腹の中で消化されて宗氣となり榮となり衛となることを御飯をたくときの状態にたとへたのであります。

#### 相火と君火相火は今の性ホルモン

この宗、榮、衛の三つをして運行せしむる根元的な力は何かであるかといふにそれを漢法では相火といつて居ります。宰相の相であります、漢法では吾々の生命を維持する一つの根元的な力つまり生命力であります、如斯根原的的生命力は非常に大切なものであります、君王に譬へるべきものであるから之を君火といひます。

君火は心臓に宿つて居ると考へられて居ります。この君火に對して相火といふのが別にあります。相火は十四と十五の背骨、即ち脊椎の十四番目と十五番目との間にあります、丁度その點は兩方の腎臟を結びつけた處であります、此處の處に相火といふものが宿つて居ると考へられて居ります。

相火はどういふものかと言へば、今の學問では性ホルモンであります。性的ホルモン、昔もこれを吾々の生命力について重要なものと考へて居つた、實際性的ホルモンの盛んな人は精力家であります、そして何でもよく出來ます。又性

を榮養するものであるといふので焦といつて之を軀幹の上、中、下につけて上焦、中焦、下焦即ち三焦といつたので、三焦といへば丁度解剖學的な名稱のやうであります、實は無形的機能の三の機能の現れる場所と關聯して命名した名稱なのであります。斯様な觀方は科學的醫學からいへば甚だ縁遠いが矢張り一つのものを全體に觀る。細かく解剖學によらないで人間を一單位として觀察するための理論、即ち人體に關する形而上學であります。

此の三焦と臟腑の説明が稍々深微まりして來ました、腑と三焦はかういふものであると覺えて頂きますと、それから後の主治効用は説明を申上げるまでもない。心腹脹滿全く食を思はず(黒板)お腹がゴロゴロ言つて下痢します、それから逆吐、えづく、それから吐く。

一體漢法では下痢を泄瀉と痢疾とに區別します、泄瀉は普通の加答兒性下痢、痢疾といふのは現今の細菌性下痢であります。赤痢とか疫痢、そういふものが痢疾といひます。

#### 四君子湯各藥味の藥効

それでこの四君子湯の藥味は此處に書いてあります。

人參 白朮炒 白茯苓 炙甘草

この四つ

人參は御承知の通り人體一般の活動力を増させる、元氣を

七



よくします。元氣をよくするといふことは第一に血液の循環作用が活潑になることとあります。第二にホルモンの如き内分泌作用、唾液、腸液、胆汁、尿排泄等の外分泌が旺盛になることとあります。斯様な効果のある人參を用ひるのであります。身體全體の機能が活潑になるから之を漢法では利氣劑といつてゐます。茲に芦を去るとあります。之は人參の頭部にくびれた所があります。あれを芦といふのであります。があれは効果が変わりますからあれを去つて用ひるといふのであります。これだけ取去つて使へと綿密に書いてあります。

人參は温性であります。

次に白朮は味甘く性質は温でありますから身體を温めます。これは健胃劑で胃の働きをよくします。

それから茯苓は甘く温であります。こいつはつまり胃の中の神經を所謂氣を調節する、粘膜を鼓舞して胃の中の鬱血を除去します。胃の中の鬱血をとる作用であります。

それから次に甘草は凡ての藥品の働きを調和してゆく。それから矢張胃の筋肉の弛緩を柔げて神經を鎮靜させる作用があるのであります。一般に温めるといふことは機能をよくすることであり、胃に於ても胃を温める事は胃の働きをよくします。特別胃を刺激するとか昂奮させる特別な強い薬は入つて居らぬ、どの薬を見ても不偏不倚であつて君子の如くである。

から四君子湯と稱せられてゐるのであります。白朮炒 甘草炙と書いてあります。炒といふのは物によつて炒る事であり、炙も矢張り焼く事であり、炙は器に入れてゐること、炙は直接火にあぶることであり、熱を加えますことはどういふ事になりますかといふと温める働きを一層強くする事であり、

### 現代の病理解剖學と漢法の陰陽

さて漢法の方では陰陽といふ事を非常に喧ましくいふのでありまして、病氣の診斷でありましても現今のやうに人間の身體のどの部分にどんな變化がある場合にそれは何病であるといふ風にいはない、勿論病理學がなかつたからかやうな病理解剖學的な變化は分らない、また細菌學も發達してゐなかつたから細菌によつて病氣が起るなどとはいはない。病理解剖學などを根據としないでたゞ病氣は陰陽の調和がとれなかつた爲に起るとかやういふ觀方をするのであります。天地間のあらゆる物は要するに陰陽に分けてゆく事が出来た。

陰陽といふてもそれ／＼の場合純粹に陰のもの、陽のものがあるかといへばさういふものはないのであります。一つの身體でも陰と陽とがある程度に配合されたものであります。それで健康なる場合を例へば陰が五十%、陽が五十%であ

ばよく健康が保てますと假定しますと若し陰が八十になり陽が二十になるか或はその反對になれば病氣になると考へて居つたのであります。

陰の勝てゐる時は陽の藥りを多く盛つてやる、それから陽が勝つて來ますと陰の藥をやる。

靈扶斯に羅つて熱が出ますと陽氣が勝つて來たのだから寒冷の藥を盛つて行つて陽を瀉してやる、例へば陰陽を説明するのには時計の振子を例にとり、こちらは陽としてこちらは陰であるとし、振子を振りますとこれが動いて來ます。陽の方へ行つてそれから陽になり切ると言へば行き切る事はない、又一定の時に陰の方へ返り、眞中の處は陰陽が各五十%、陰が八十二の時は陽が十八といふ事になります。かういふ風に陰陽の消長するのは時計の振子の様なものであります。陽が増えれば陰が少なくなる、振子が眞中にきたときが健康とすれば傾けば病氣であるといへます。

陰陽からいひますと、時間といふものは陽になります。哲學上、物理學上空間は陰で時間とは陽であります。

椎茸を山から取つて來ますとジクジクして居ります、陰の強いものは冷え切る、所謂陰の強いものであります。それを木樵なんかは鹽をつけて喰べて居ります。鹽は陽性がつよいからそれをつけて喰べれば身體に當らない、生まの椎茸だけたべたら下痢します。それ程陰のつよいものであります。

陰性の椎茸には陽性の鹽をつけて更に焼いて熱を加えます。熱は陽であります。火ですから、餘計強い熱を加え鹽をつけてたべます、でないとお腹をこはします。

處が椎茸を長くおきますと水分が蒸發して乾燥して來ます。し天火に干しますと陰がとれて割合に陽になります。時間を與へますから陽に變つて來ます、それから煮るとか、焼くとかしますとウンと陽性になります。

生姜は生までは辛温と言つて陽性であり、干しますと乾姜であります。これは一層陽性でありましてお腹の中を温めますから循環をよくします、それ位干しただけで非常に陽性になります、更に炒りますと炮姜となつて一層に陽性になります。熱を加え時間を加えますと陽が加はつて來ます。かういふ風に時間を陽にとつて行きます。

四君子湯を用ふるときは胃の働きは榮衛の氣が虚して居ります、即ち胃の働きが麻痺して居ります。五臟六腑が麻痺して居る時は昂奮させます、鞭撻する意味で特に陽性の藥りをもつて行くのであります。

この藥の藥効を強くする爲に白朮でも何でも炮して充分に陽性にして用ふるのであります、さういふ意味で特に炒といふ字がかゝれてあるのであります。



## 應用

### 半身不隨痺疾瘡癩夜尿症及氣管支カタル等

此の四君子湯の應用方法は、可なり一般的で普通は胃弱に用ひます胃腸のよわい人に用ひますと補ひとしていゝのであり、四君子湯は又時に面白い病氣に當つてもよく癒ります。

第一半身不隨、これは九〇%まで腦溢血であります。腦エンボリーによつて起る半身不隨もあり、溢血は腦の血管が破裂して外へ出ます。エンボリーは腦の血管が詰つて末梢に血液が通はなくなつて麻痺状態に陥りますが癒りやすいものであります、恢復します。四君子湯が半身不隨が癒るか、エンボリーによる半身不隨かも知れないが兎に角半身不隨の場合に四君子湯を用ひます。

それから痔の出血があつていつまでも止まない時には四君子湯を用ひます非常に痔が甚くなつて貧血を來して耳が鳴つて足に力がなくなり食欲がなくなつて所謂貧血症をおこす、そういう場合に四君子湯に白扁豆と黃耆を加へ用ひますと矢張伸々よくなります。私の方へ來られた方で三年間血が出て止まらないが割合平氣だつたです。大きな體の婦人で十八貫匁もある様な人でした。私の方へ來られて薬を上げました處が一週間で癒つてしまつた例があります。この時は上述の六

味で癒つてしまひます。

又脱肛などがあつた場合は竹麻、柴胡、蒼朮を加へます。この場合竹麻、柴胡、蒼朮は下垂してゐる肛門を引上げて肛門の炎症を去らしめるのでせう。

それから病後に下痢が續きましていつまでも癒らないで手足が腫えます、かやうに浮腫を起す場合四君子湯に竹麻、柴胡、陳皮を加へますとよくなります。

四肢の節がだるく咽喉がゼロゼロいつて居る場合、四君子湯に竹瀝、生姜の汁を加えて用ひますといふ事であり

ます。腹小便をするのには四君子湯の茯苓を去つて黃耆を加へますと腹小便によくきます。

それから瘡疽が出来て傷口がよくならない場合或は切傷にもよろしい。

瘡瘍であります、傷口が癒らないふさがないのは氣が結して居りますが四君子湯を用ひます。此等の場合には四君子湯に當歸を加へて用ひますが、口がふさいでしまひます。

それから下痢の止みにくい場合一向下痢が水下りではないが柔らかな大便が出て癒らない場合酢につけて炒つた烏薬とそれに生姜と大棗を四君子湯に加えて用ひますと癒つてしまふ。

赤痢の様なもの或は粘液便が出て癒らない場合にも黃耆と

川芎と其上に蜜で練つた罌粟殼即ち蜜炒の罌粟殼を加えて與へますとよろしい。

その外に胃腸がよわくて所謂痼癖持の人を癒す、特に胃腸よわく痼癖持の人怒りつばい人は當歸、陳皮、生姜を加へますそれから胃腸がよわくて同時に心臓のよわい人があります

そういう時は生地黃、當歸、麥門冬を加へます。肺のよわい、氣管支カタル、胃腸もよわく同時に漫性の氣管支カタルの人は黃耆、五味子、麥門冬を加へます、黃耆は皮膚作用を調節するから寝汗をとめ、五味子は收斂劑、麥門冬は祛痰滋陰劑であります。

つまり胃腸よわく同時に性慾の全然ない時は熟地黃に桂枝を加えて用ひます。

つまりかういふ風に胃腸がよわいその爲に精神力の奮はな

## 處方

### (二) 六君子湯 (リククンシタウ)

の人でありますと同じく用ひます。尙精神力がハツキリしない一層精神力の衰えて居る人には四君子湯に丁香、木香を用ひますと頭がシャンとして來ます。

貧血を伴ふ時又痰が絶えず出る人には二陳湯を合して六君子湯といふのを與へる。二陳湯とは陳皮、半夏、茯苓、甘草の四味でありますが之と四君子湯を合併します。

顔色わるく手足がだるく元氣のない痰をよく吐く人にはこの二陳湯を加へるのであります、この二陳湯は痰の薬であります。

此の二陳湯と四君子湯とを混ぜまして六味になつたものを六君子湯とかういふのであります。

その次に此處に書いて居ります、第二番目は之であります。さき程申ました一錢、二錢といふのは一匁目に當ります。甘草は普通皆日本人は殊に少なく用ひますが好まれては居ります。

支那は多量に用ひられて居ります、神經的な人は甘草を多く入れますと好まれない。一般向きでは甘草を多量にして居ります。

人參、白朮、茯苓、陳皮、半夏各一錢 甘草二分  
右水煎服す。



## 主治効能

脾胃虚弱 飲食少思 或は久しく瘧利を患ひ 若くは内熱を覺え 或は飲食化し難く酸を作し虚火に屬する者を治す

とかういふ風に載つて居ります。この六君子湯は處方で申上げました通りにかういふ風に書いてあります。又胃腸よわくそしてその爲に氣分が一向勝れない、ハキ／＼しないでその上に痰を持つて居るやうなそういふ人にはいゝわけでありまして、此處に書いてあります酸を作すとはつまり消化がわるいことでもあります。現今でいふ過酸症といひますか、つまり喰べたものが消化されないで積みすが上るといふ様な時に用ひます。

### 半夏と陳皮の藥効

六君子湯の藥味半夏だけは稍々辛温性なのでありますがあとは極く甘性ですから柔順なし薬りであります。四君子湯と同じく不偏不倚の六味が寄つて出来たものであるから六君子湯といふて居ります。

この藥はその藥味からいゝますと半夏といふのは胃の中を燥かす藥であります。燥かすといふのはつまり普通漢法でいふ温を燥す、氣が衰へる、即ち營衛の氣がおとろえると、つ

す、そして舌は濡れて居ります。そういふ胃を半夏は乾かします。胃液の分泌の障害を斷つて清淨に戻します、そういふ力があります。

半夏は温を乾かします力があるのであります。陳皮はどうであるかと言へば、その半夏の効果を一層よくする、例へばコップに砂糖水を入れておきますと砂糖は沈殿します。そこへ赤いインキを落しますと水は赤くなります。砂糖のところにはつかない、砂糖は白い、砂糖の部分赤くするにはかき廻します。かき廻すとその力で砂糖も赤くなります。このかき廻す力が陳皮であります。

昔の人はかやうな想定の下に藥を用いて居りましたわけでありませう。つまり痰が胃の内壁に——痰といへば今は胃から出るものでないことは知られてゐます、氣管支の分泌物といつて居りますが昔は胃から出るものと考えて居つたので胃の中に粘液が溜つて居る、之を痰といつた——胃壁に粘液が溜つて居る、その粘液を一邊掘り返して止ます力が陳皮であります。

## 應用

瘧疾の治驗例 胃腸弱く結核性疾患ひきつけ 其他

六君子湯は吾々の所へ色々の病人が來ますが色々とあつちの醫者を廻り、こつちの醫者を廻り結局容態が分らないで吾

まり身體の働きがおとろえますと、濕氣がよつて來ます。例へば、部屋の中でも掃除をしないで薬つておきますと塵芥が溜つて來て濕氣を持ちます。人間の身體でも働きがよわりますと其處へ濕氣がよつて來ます。それは現代向に言へば輕い炎症があつて分泌物を出して遂には浮腫を來すやうになる。漢法では之を濕は虛の強きに從つて集るといつてゐるのであります。

胃は食物が入つて來ますと胃液を分泌します、そしてその消化が終つて腸へ行きますと胃液の分泌は止ります。それが食物が腸へ行つてもまだ胃液の分泌がある場合は慢性の胃カタルに相違ないのであります。

食物が入つて胃が働く時、充分胃液が分泌しないで休まねばならぬ時にダラ／＼と働いて居るのであります。胃の中は絶えず胃液が分泌されて居ります。そういふものを指して漢法では温といひます。そういふ人の舌は濡れて居ります。舌を水へつけて水から上げたすぐの様な感じであります、どつちかと言へば舌の色も丁度赤いのが桃色をして居ります。それも桃色に紫味がかゝつて居ります。

そういふ色の舌を水から今あげた許りの様に濡れて居ります、そういふものは温が多いからして胃酸過多、昔は飲といひます。胃液がダラ／＼出て居ります、お腹を叩けばチャブ／＼といひます。鳩尾を叩けばやはりチャブチャブといひま

々の方へやつて來ますので、私共はそんな患者は一度胃腸を整えるため、色々な藥を飲みすぎて胃腸を荒されて居る場合胃腸を緩和させる爲、六君子湯を二三日やつて見る。胃腸を調へてからこつちの此處と思ふ藥をやりますとよくきゝます。つまり地均らしをやる。

夏なんかよく子供でも大人でも喰べ過ぎ風邪引きで吐きくだしを致します。その場合六君子湯に夏は生姜と黄連を加えてやりますと胃の熱をとりまします。或は吐き氣でもあるといふ場合は藿香と白豆蔻、冬であればその上に乾姜と縮砂を加えます。温める意味であります。又たべすぎて吐き下しする場合、六君子湯に麥芽、山査子を加へ與へる麥芽は澱粉類を、山査子は蛋白質を消化する力があります。

それから子供のひきつけにやりました消化不良によく吐き下しをやつて、ひきつけを起す場合にも六君子湯、附子を加えてやりますと非常によくなります。

それから胃腸が弱くて、そして顔色がわるく氣分が勝れない、氣管支カタルの氣味で喰すぎると胸やけがしますと香附子、縮砂、藿香を加えて與へる、之を香砂六君子湯と申します。

これはまあ胃痛なんかの時に胸がモヤ／＼して食事がいけない時にやりました患者に感謝されます。胸が仲々よくすきます。



香砂六君子湯で胃痛を癒して偉い名を挙げた功名談があります。それは静岡縣に居る病人でありますが、私が診たのでありませんが、レントゲンも攝り相當な醫者が胃痛の診斷を與えてゐた患者から藥を乞はれまして胃痛には藥はないと言つて断はりましたがたつての希望故私は香砂六君子湯を十日分作つて送つてやつたところ、塊りがとれてしまつた。レントゲンで診た胃痛の塊りがとれてしまつたのであります。それを醫師の懇談會の席上で發表して胃痛を癒す藥が大敗にあるといふので評判になつたと言つて寄越しました。それからずつと癒つて居ります。

痛でなかつたからでありませうが、痛なら癒らないと思ひますがどういふ間違なのですか塊りが融けてしまつたのは事實であります。

藥りは往々不思議です、本當の痛でなかつたかしの慢性の胃私の處へ来る患者は私が見て痛と診斷したものは伸々癒らないのであります。これは本當に癒つたといふて来て居りますけれども痛の疑のある時はこれをやりまして患者は非常に喜びます。

それから或はお腹が痛えて痛の様な疑ひがあれば慢性の胃カタルで、六君子湯に吳茱萸を加えますとよるこばれますねこれは今日の結核見たいな病氣ですが胸がわるく午後になりますと熱く感じます。發熱しますけれど脈は變らない、そ

れから痰も咳も出ないが熱だけ出ますといふ人は胃腸がわるく結核性の疾患であります。そういふ人は六君子湯に八味丸を同時にのませますとよくきゝます。それから今申し上げるのを忘れましたが特に胃から水かわく場合これには炮姜加味してやりますと胸やけが止まります。むかつきがあつてそして酔い水が上る場合旋覆花を加えてもよくきゝます。

それから口では美味くて喰べると矢張り腹が張り氣味で手足の力が出ない顔色がわるく肥えられない人は六君子湯に黄蘗と枳實を加えてそしてこれに生薑を入れて與えます。御飯をたべるとむか／＼して来るそういふ場合に木香、炮姜に六君子湯を加えます。

胃がわるい爲目眩する人が多いのであります。そういふ人は胃の部分を押しますと動悸がして居ります。そういふ人は胃がわるい爲である事を知らないで居る人が非常に多い。六君子湯、當歸、川芎、桔梗、白芷、天麻、黃芪を加えます。そうしますとそれが止つて來ます。それに茯苓、白朮、桂枝甘草を盛つてもよくきゝます。矢張り目眩にも非常によろしいこつちには藥味が多いといふだけであります。この茯苓、桂枝白朮、甘草等をやる時は元氣のいゝ人にもよろしい。

氣虛のない人、顔色の青くない元氣の人で身體の太つて居る人にも胃がわるくて目眩のある人にもよくきゝます。

この方がよろしい。(六つ入つて居る方を示す)

### (三) 四物湯 (シモツタウ)

六君子湯は氣虛の人であります。胃腸病人らしい風の人

榮衛を調益し、氣血を滋養し、衝任虚損、月水不調、臍腹痛、崩中漏下、血瘕地硬、發歇疼痛、妊娠宿冷將理宜を失し、胎動して安からず、血下つて止まず、及び産後虚に乗じて風寒内に搏ち、惡露下らず結して癥聚を生じ、小腹堅痛、時に寒熱を作すを治す。

熟乾地黄酒蒸 白芍藥 當歸去酒浸微炒 川芎各等分  
右煎末となし、毎服三錢、水一盞半、八分に煎して、空心に熱服す。若し妊娠胎動して安からず、下血止まざる者には艾十葉、阿膠一片を加へ、同じく煎すること前法の如くす。或は血藏虚冷、崩中去血過多にも亦膠艾を加へて煎す。

今日はこの四物湯から又やまして頂きます、これも矢張この前の四君子湯と同じ様に和劑の局方に載つて居る處方です。これは華陀といふ外科の有名な醫師の作つたものと

りますが、その中にはこの處方は載つて居りませんです。

どうしてもこれは金匱要略に載つて居ります處の芍藥歸脾湯といふものが源であります。此の處方を後世の人が改造したものであります。この芍藥歸脾湯といふのは當歸、芍藥、川芎、地黄、阿膠、艾葉、甘草と之だけの藥味即ち七つの藥味となつて居ります。その内阿膠、甘草、艾葉だけ抜きとつて作つたものであらうとかういはれて居ります。兎に角これはこの前申上げました氣血のうち血を調整する藥であります。つまり今でいふ處の体液、血液、内分泌液、外分泌液、等内體の物質的方面の欠陥を補ふのに非常に有効なのであります。だから之れを補血劑、漢法でいふ補血劑となつて居ります。それでテキストに書いてあります通り衝任といふのは胸の氣が衝き上つて來る事で、血瘕塊硬これはつまりお腹の中に悪い血、古血が蓄つて塊になつて居る。例へば子宮筋腫の様なもの、腹膜炎の癒着した様なものを指すものと思ひます。發歇とは間歇的に發すること痛疼時々起ること、宿冷とは腹が絶えず冷える、かういふ風な症候に應用する藥で



あります。

主として婦人科に非常に関係がある状態を書いて居ります。それでこの熟地黄、乾地黄これらはどちらでもよろしいが、何れも酒で蒸して用ふる。芍薬 當歸 川芎 これらを等分にこの前のテキストは日本人に適當する様に工夫してあります。が局方そのもの分量は等分でありませぬ。前にテキストとして書き抜きましたものは日本の書物であります。原本は抜いて居ります。日本人は當歸と地黄を多くして川芎 芍薬は比較的少ない、この方が日本人に向くやうであります。ですけれどこれは體質を診てやるべきで、胃腸のよい人には地黄が多いと胃になすみまして飲めない、等分といふ方がよからうと思ひます。等分といふ事にして置きました多少體質で加減しておく—テキスト、右鹿末となし—茲にある通り、この艾葉と河膠を加えて出血などに用ひてゐます、之に更に甘草を加へると芍歸膠芥湯となります。出血を止めるにはこの芍歸膠芥湯の方がよろしい、よく効くわけでありませぬ。

即ち陰、血といふものは陰でありまして陰を潤ほし、それから血を増やすといふ意味では芍歸膠芥湯の方が効果が多いわけでありませぬ。それに阿膠に艾葉、甘草の甘い味が有効なのであらうとかういふ風に解釋されて居ります。

此の四味のうち熟地黄にそれから當歸 芍薬 この三つがつまり血をつくる素である、そして川芎がその血になる働き

を促がすと解釋されて居ります。

當歸 芍薬 地黄を以て五臟の營を養ふ川芎が、その五臟の働きつまり物質的な方面は當歸 芍薬 地黄でもつて物質的の原料をつくる、そして川芎がその五臟の働きを盛にする。即ち機能を活潑にする、斯様にして血が増えて行くと漢法では解釋されて居ります。だからこの血が増えるといふ意味でこの藥は貧血の人に非常にいゝわけでありませぬ、併し急性的出血即ち子宮出血、吐血、咯血等の劇しい場合四物湯を用ひますと却つて悪い結果を來します、つまりそういふ場合は吾々身體は陰に變つて居ります、陽氣を失つて居る時に陰のつよい藥を用ひますと益々悪くなりませぬといふわけでありませぬ。とにかく四物湯は御承知の通り婦人病に欠くべからざる藥であります。

抑も漢法では吾々の身体は第一番に左の方を血、右の方を氣、右半身が氣、左半身が血であると解釋して居ります。半身不隨を起した場合この前に話した通り右半身不隨の時は四君子湯か六君子湯を、左半身の麻痺した場合は四物湯を加減致します。四物湯に紅花 竹瀝 桃仁 姜汁 これを加へて與へます。或は四物湯に羌活 防風を加へてもよろしいのであります。

それから月經不調の時、經血の氣が黒くそして暗紫黒色であつて患者の脈が早い、即脈數である場合、かういふ場合は婦

人の子宮に内熱即ち炎症があります、炎症があるためにさういふ月經不調を來す、かういふ風に解釋しまして四物湯に黃芩 黃連を加味します、その反對に脈が通、即ちおそい、そして經血が出て來ると血が塊つて居る。凝血して居る場合つまり急性の炎症の反對に子宮生殖器の働きが鈍つて居る場合、即ち子宮が俗にいふ冷え切つて居る場合、之を漢法では寒といひますが寒のときは働きが半分麻痺の状態にあるのでありますから、四物湯に桂枝と附子を加えます、附子は温めます。桂枝は辛なる味をもつて刺戟します。血液の循環をよくします、この附子と桂枝との力によつて寒を驅逐します。

又極く肥満した婦人で月經不調があり絶えず氣管支カタルでもつて絶えず痰を出すといふ場合、四物湯に半夏と陳皮、天南星を加えて用ひます。半夏も天南星も燥かします、即ち分泌物を少なくします。それから月經不調があり、慢性的氣管支カタルがあり瘦せて居つて絶えず微熱を出す様な婦人は四物湯に山梔子、黃柏、知母を加えます。知母と黃柏は内熱を下げます。又、胃腸の下垂などがありまして氣分が憂鬱で明朗な氣分になれず煩さそうにして億劫かるといふ人には蒼朮香附子 神麴 縮砂を加えますと氣分が恢復して來ます。月經滯り腫の人に四物湯に桃仁 紅花 延胡索 桂枝かういふものを加えます。それから四物湯の用ひ方は先程申上げた通り胃腸の悪いものは地黄を用ひられない。その他大變

下痢りやすい人は當歸を大量用ひられない、當歸の分量を減らして、それからお腹が冷えて痛む人は芍薬を少し減さねばならぬ。それからこの少し息動しかる人喘息があつたり氣管支カタルがあつたりして息動しがる人は川芎を減して用ひます。そういふ用ひ方の習慣があるわけでありませぬ。等分といひましても體質に應じて多少手加減せねばなりません。それから子痛といふ病氣で妊娠中に痙攣を發する。この痙攣は四物湯に黃連、黃芩と半夏、生薑とこれだけ加えます、それからこの痔漏があつて出血して痛む人には黃柏 黃芩 槐花これは可成よく痔出血が止ります、痔出血のとき血虛の場合、即ち瘦方の人で貧血して居る様な人、皮膚の艶の悪い人は四物湯に以上の加減をしますが反對に氣虛で青白く肥つて居る人は四君子湯にこの前の白扁豆と黃耆を加味します、茲に注意せねばならんことは効くのは黃耆と白扁豆がきくのではない。人參と白朮 茯苓 甘草とこの四つのもに二つが加はつて六つのも、働きであります。六君子湯に黃耆と白扁豆とを加へても四物湯にこれを加へても何れもきかない、これが漢藥の面白い處であつて六つのものが全體になつて一つの働きを出して癒らせます。白扁豆と黃耆だけでは効かない、四君子湯にまぜてこそ新しい作用が現はれて來まして、四物湯に黃柏 黃芩 槐花を加へて出血が止ります。槐花といふものは血を止めるものであります、それだけでも多少は効きま



すが四物湯にこの三つを加へて始めて吃驚する様な効果を現はします。槐花だけを用ひますと民間療法で効果はあるが甚だ微弱である。體質を診て四物湯、血虚の體質と診た場合四物湯に黄柏、黄芩、槐花を用ひます。此の人は氣虚の爲に機能が衰えて貧血なんかある場合は四君子湯加減を用ひる、反對に身體の物質的方面が缺けて居る、即ち血虚の場合は四物湯加減を持つて來るといふ場合に體質を診て薬をやつて行かないと人を驚かす様な効果は出ない、どんな體質の人でも一律に四物湯に加減してやつてみるだけでは賣薬と同じ事になります、體質に應じて四君子湯を用ひるとか、四物湯をもつてゆくといふ事をしてこそ効果が現はれて來ます。

次に結核性の體質であつて發熱する、これは漢法の方では陰虛の體質、陰といふのは血の事、血虚とよく似て居ります。貧血して身體が瘦せて皮膚がカサ／＼して居る、そつといふ人が時々熱を出す、そつといふものは現代醫學では結核性體質といつてゐますがそつといふ時は四物湯に知母と黄柏を加へます。そうしますと熱がとれます、それでも熱がとれなければ龜板を用ひます。

それから或は咳でも出て來ますといふ時は麥門冬、天門冬を加へます。食慾がわるくなれば白朮、陳皮かういふものを加へます。斯様に四物湯に知母、黄柏、麥門冬、天門冬、白朮、陳皮を加へたものは有名な朱丹溪の滋陰降火湯といふ處方

々悪くなつて、眠ると夜中になつて胸やけを起して來ます。嘔雜といつてそつといふ場合には四物湯に香附子、黄連、梔子貝母を加へて與へます、夜寝てゐて夜中十二時を過ぎると胸やけがして來る場合にやる處方でありませぬ。

それから婦人によくある子宮疾患、生殖器の疾患の爲に足が吊つたり、足が冷えたりそして腰が痛んだり、腰がだるく足が吊り足が冷える、そつといふ事を訴へられる事が随分あります。それには四物湯に紅花と桃仁、牛膝、馬鞭草、それだけ加へます。四物湯の加減は随分ありまして眼科にもよく効

#### (四) 八物湯 (ハチモツタウ)

心肺虚損、皮聚つて毛落ち、血脈虚損、婦人月水期を愆るを治す。宜く氣を益し、血を和すべし。

白朮、人參、黄耆、茯苓、川芎、熟地黄、當歸、芍藥各等分  
右鹿朮、服すること五七錢、水一盞、煎じて七分に至り滓を去り食後に温服す。

四物湯はそれ位にしまして次に八物湯であります。八物湯は一名八珍湯とも申します。これは醫學綱目とか、古今醫統とか、玉機微義とかいふ書物には常に機要の二字を冠して機要八物湯として記載されて居るのであります。機要八物湯と

なのであります。これは何れ後で申上げる機会があらうと思ひますが、滋陰降火湯といふものは高熱があつても精神力の明瞭して居る患者にやります、頭が非常にハツキリしてちつとも眠むがらない、夜分は寝ても人に對する態度はハツキリして居る患者にやる處方でありませぬ。精神力がボンヤリして來る患者に與へる處方は變つて來ます。

それから大病をした後チブスの様な大病の後チブスの爲に中耳炎を起して耳が聴へなくなることがあります。又大病などで耳が速くなり或は聴へなくなりました場合、四物湯に黄柏を加へます。そうしますと聴へる様になります。それから又脚氣のために筋肉の痙攣を起して來ます。こぶらがへりがして身體に非常に熱感を訴へる。體温計で測つても熱はないのに患者は熱い／＼と言ひます、脚がほめきあつて困る、こぶらがへりがし易い、眩暈がほめくといふ場合は四物湯に黄芩と紅花を、それから少し普通の脚氣で少し脚がむくみを持つ場合水腫、浮腫を來す脚氣それには四物湯に薑苳仁、木瓜、蒼朮を加へます。漢法の方では男と女とでは脚氣の薬は違つて來ます。西洋醫學ではおしなべてウイタミンBの注射を致しますが、その割に効きませぬが……

次に矢張り土台は胃腸の弱い人でありませぬ。そつといふ人は頭を使ひますと所謂俗に謂ふ神經衰弱の氣味で胃腸の弱い爲に身體は瘦せ形でそつといふ人が非常に頭を使ひますと胃が倍きます。眼が結膜炎を起しまして、そして眼の玉が眞赤になつて眩しくて眼をあけて居られない、そしてひどく痛むといふ場合には四物湯に羌活、防風、龍胆、それから防己、これだけ加へますと痛みが止つて參ります。四物湯に地黄が入つて居りますため胃腸の弱い者が飲みますとなすみまして食慾が減つて來ます。地黄を熱のある場合熟地黄、乾地黄の代りに鮮地黄、生の白いすぐ取つた地黄、薩摩芋の様な細い生の水氣のある鮮地黄を用ひます。

は劉河間といふ有名な名醫の創設したものであると言はれて居ります。普通八物湯と申しますのは四物湯に四君子湯を合したものであります、ところが四君子湯と四物湯を合したものでありますから人參、白朮、茯苓、甘草、それから、地黄、川芎、芍藥、當歸とそれだけであります。機要の八物湯は甘草が無くて黄耆が入つて居ります。機要の方はこの書き抜きにありませぬ通り八味八つの藥味で分量は等分になつて居ります。處で普通の八物湯、即ち局方の四君子湯を入れてあるものは七味が等分、甘草だけが半量になつて居ります。最初は



矢張り機要の甘草の代りに黄耆が入つて機要八物湯が行はれて居つたが、後世になつて四物湯に局方の四君子湯を合して黄耆の代りに甘草を他の分量の半分だけ使ふといふ事になつたのであらうと本に載つて居ります。その主治効能は主として其處に書き抜いてある通りに虚損であります。

心臓並に肺臓虚損と皮膚の皺がよつて毛が抜ける、皮膚の榮養悪く血液の循環が悪くなつて、婦人では月経が滞り勝になつたり早くなつたりする。要するにそういふ身体であるから機能を活潑にしてやる、そしてその血液を増してやる、血液の循環の悪いものを整へてやる、かういふ様にすればよいのであるが、これには八物湯がよいのでありますと載つて居ります。

それではこの間申上げました通り四君子湯は氣虚の薬である。四物湯は血虚の薬であります、兩方併せまして氣血を熾にするとかういふ風に書いてあるのであります、片一方だけ用ひますといふと吾々の身體は氣といふ精神的の無形方面のものといふ有形的、物質的の方面の二つに分れて居ります。こちらの働きをこちらの物質と巧く調和されて居る場合

(五)十全大補湯 (ジフゼンタイホタウ)

男子婦人諸虚不足、五勞七傷、飲食進まず、久し

く虚損を病み、時に潮熱を發し、氣骨脊を改め、

抱急疼痛、夢に遺精し、面色痿黃、脚膝力なく一切の病後氣奮の如くならず、憂愁思慮、氣血を傷動し、喘嗽中滿、脾胃の氣弱く、五心煩悶するを治す。此の薬性温にして熱ならず、平補にして効あり、氣を養ひ、神を育し、脾を醒し、渴を止め正を順し、邪を辟り脾胃を温煖す。

白茯苓。白朮。人參。熟地。黄耆。白芍藥。粉草。黄耆。肉桂。鹿角。去火。川芎。各等分。右鹿末となし毎服二大錢、水一盞、生姜三片棗子二箇同じく七分に煎じ時に拘らず温服す。此薬は虚損を補つて大に神効あり。

次は十全大補湯であります、これも矢張り局方に記載されて居る處方であります。誰れが作ったものかその處は分りません。十全と稱しますのはつまりその効能が氣を補ふに専らならず、血を補ふに専らならず、熱に偏せず、寒に偏せずして氣、血、陰、陽、表、裏、内、外即ち身體の凡てに涉つて巧く補ふ事が出来る、即ち十全の功がある所から十全大補湯と名づけたのであります。

主治効能は其處は前述の様に書いてあります、其處で五勞七傷といふのであります。これが厄介なのであります、

始めて完全な身體で一人前の働きをします。いくら氣即ち機能だけ熾しあつても却つて病氣を起します。又血、肉體的方面が増え過ぎても病氣になります。そういふ風なやり方で行きまゝと完全な効果が現れるといふ理由で八物湯が造られたのであります。これの應用と致しまして食べ過ぎのため下痢した場合、或は赤痢なんかでこじれて癒らない場合、そういふ場合にこの八物湯に地黄を去つて神龜、黄連、縮砂、澤瀉、陳皮、半夏、防風、阿膠、生姜これだけ加へます。之を加減八珍湯といひます。次に婦人病、月經不順の婦人でありませういふ方が結核性の病氣にかゝりまして痰を出したり、熱を出すそういふ時は八物湯に小柴胡湯を加へて用ひます。小柴胡湯については何れ又申上げますが、その薬味は柴胡、黄芩、半夏、甘草、人參、大棗、生姜からなつて居ります。この小柴胡湯を八物湯に合して用ひますと巧く行くと熱が下り症候して參ります。八物湯は應用が色々ありますが要するに四物湯の症、四君子湯の症から考へれば應用範圍は自ら分ることでありませうからまあこれ位にして置ませう。

五勞といふのはつまり志勞、思勞、心勞、憂勞、疲勞を五勞といひます。明確した區別は分りませんが、心身の疲勞を昔の人はかういふ風に區別をして居ります。それから五勞の次に昔の人は六極七傷とかういふ風に並べていふたのであります。

六極といふのは氣極、血極、筋極、骨極、髓極、精極とかういふ風にいふて居ります。七傷は肺傷、肝傷、心傷、脾傷、腎傷、腸傷、骨傷であります。この極といふのは虚と同じやうな意味であります、だから氣極は氣虚といふ意味、筋極は一寸現代の脚氣の様なものであります。脚氣、リウマチの様に筋肉が痛んで來るのであります、そしてこれが甚しくなりますと爪が痛みます、そういふ場合を筋極、骨極は骨の微毒の如きもの俗にいふ骨がらみであります。髓極は矢張り骨に關連したものであります、精極は精神上のものであります。

肺傷は肺病でありまして肝傷は肝臓の機能が悪くなり、從つて疝が高ぶります、即ち神經質になります、肝瘵持になります、心傷は神經衰弱、健忘症の如きもの、心は精神、心臓の心でなく精神の神であります。

腎傷は腎臓の病氣、性慾に關係したものの、性ホルモンの分泌の悪くなる場合であります。腸傷は循環がわるい、骨傷も骨關節に關連したものであります。凡て病氣が非常にわるくなり切つた場合をいふて居ります。



かういふとにかく五勞七傷は色んな精神的、肉體的の色んな病氣と解したらよろしいと思ひます。それで藥味は其處に書いてあります通りに白茯苓を焙つて用ひます。——(上述の参照)——粉草は甘草の事でありませぬ。粉草は汾といふ字を書きます、このうちで黄耆、それから桂枝、芍藥、甘草、それに大棗と生姜を加へますとそれは黄耆建中湯となります。それから地黄、當歸、川芎、芍藥、これが四物湯であります。人参、白朮、茯苓、甘草がこれが四君子湯であります。四君子湯に四物湯を合したならば八物湯、それに黄耆、建中湯を合したものが十全大補湯とかういふわけであります。黄耆建中湯と四物湯を合したものと双和散と申します。四物湯と四君子湯は八物湯、八陳湯であります。これ全部合したものは十全大補湯であらういふ事になります。黄耆建中湯といふのは虚勞、裡急、諸不足を治療する藥であります。

虚勞といふのは今でいふ結核性ではなくて非常に身體の疲れ易い體質のもの、まあ胃腸下垂があつて一向はき／＼しない様な身體、そして絶えずお腹の中が痛み易い、お腹を押へますと腹が筋張つて柴の上へうすい蒲團をおいてそれを上から觸るときのやうな感じがするやうな腹を持つて居る様な、そういふ人がよくあります。瘦せ方の人のお腹を見ますとふつ／＼した腹をして居ない

うどんなどを食べても汗が出易い人があります、そういふ人は黄耆を用ひますとよろしい。

そういふ人は黄耆を澤山やります、あから顔でそして如何にも血壓の高そうな人は黄耆を餘計用ひられない、用ひますと非常に苦しがります。甘草は矢張り胃腸の弱い人、酒呑みには餘り甘いから胸にならずにいけません、そういふ人には甘草を減らして用ひます。

それから此の川芎といふ藥は血液の循環をよくします藥で頭痛のぼせを引下げます。非常にいゝ藥でありますけれど、骨蒸と申しまして肺病になりますと熱が單に身體の表層部であつくなるだけでなく骨の中から蒸し立てられる様に熱くなつて苦しむ肺病が随分あります、肺癆、肺結核で骨の中から蒸し立てられる様になります。そういふ感じであります。熱には色々あります。西洋醫學では體温計で測つた形許りで、熱の性質を判断致しますが、漢法の方は主觀的の訴へを主として見まして身體の表面の熱、寒い感じの熱、水をかけられる様な寒氣がして體温が昇つて居る、寒の強い熱もあれば骨蒸といつてかういふ風に兎に角骨の中から蒸し立てるやうな熱、潮熱といつて潮の押寄せて来る様なデリ／＼と差込んで来る熱があり、悪熱と申しまして昨今の様に寒い時にでも悪熱を出す人は手足を蒲團の外へ出したがります、苦しくつて堪らないやうな熱もあります。骨蒸の熱のある場合、川芎を餘り

長くなつて筋があつて腹の中を隔りますと——圖解——實が中に入つて居る様で柔かなものであります。健康な人の腹は鏡餅の搗立ての様にありますが、かういふ風に黄耆建中湯を與へる様な人の腹は筋張つて居ります、恰度小指の様な筋がザラ／＼とふれます。細か何かを入れて風呂敷を被ぶせた様でさはると痛がります。腹が痛みやすいので氣短かになつて顔付がむづかしい、如何にも肝癆持らしい陰慘な顔をして居ります、明らかに出来ないのが黄耆建中湯をやりますと非常によくなります。

上述のやうな腹であつて微熱があり、食慾がない、そして便通が不定で固まると思ふと下痢り、くだると思ふと秘結するこれに黄耆建中湯をやりますと熱が下り食慾が出ます。

四物湯、四君子湯は今迄申上げた通りであります。さて十全大補湯を用ひます時の注意と致しましては、尿が出難い様な場合、茯苓を相當澤山用ひても差支へないが、尿が瀧壁に出る場合には茯苓を少し減らして用ひますことが方法であります、茯苓は利尿劑で隨分新陳代謝を促がす、水分の代謝を熾にする藥であります。循環をよくして利尿作用をよくして小便の出過ぎる場合は減らして用ひる事が本當であります。それから肺の弱い人、それから皮膚、呼吸を司どる機能の弱い人には黄耆がよく効きます。顔色の白い人でそして割合に肥満してゐる人があります。一寸道を歩いても曇い喰物や

澤山與へますと大根の熱は發散していけない。地黄は胃の弱い人には多く用ひられない。それから人蔘といふ奴は胃腸を健やかにする藥であります。健康の弱つて居る人間には欠く事の出来ない良藥でありますけれど、喘息それから癆咳、咳嗽の甚しい人が人蔘を續けて飲みますと益々胸苦しくなつて息ぐるしくなつて來ます。

かういふ話があります、朝鮮であつたが母親が弱いからと言つてよい人蔘を持つて來て母に澤山飲ませて見た、母はそれから暫く経つて非常に息苦しく感じて反つて苦しみ出した、それで色々醫者に見せたが分らない、然るにある醫者はこれは明らかに人蔘の中毒です、直ぐ大根を食はせろと言つて大根を喰べさせて直ぐ癒つた。大根は人蔘の働きを消すといふ、人蔘を餘りやるとのぼせる、大根はそれを避ける効能があるのです。

漢法の方では人蔘の入つて居る藥を飲む間は大根や白菜などの野菜は擲らない方が安全で人蔘の効果を消すのであります。漢藥の人蔘は滿鮮の方のものが入る事が多いですからかういふ場合、大根や白菜を喰べない事を注意して置く事が大切であります。殊に昨今の様に大根や白菜の時季で喰べる機会が多いですから折角人蔘をいれてあつても効かない事がありますからそれだけの注意は必要であります。

十全大補湯は非常にいゝ藥でありまして色んな病氣に使は



れませんが、お老人なんかが多の間特に月一、二服思ひ出して一日と十五日に十全大補湯を一日とりますと非常に効果があります。多少手足が冷へますが寒さを感じます方は身體が温つて來ます。

十全大補湯は色んな病氣に用ひます、多少加減をして用ひます。あの御承知の中將湯は十全大補湯であります、子供もよく出來ます。子供のない婦人に長く用ひさせますと子供が出來ます。

それから冷えやすい身體に矢張特に手足が冷えます場合とかお腹が冷えます場合、十全大補湯に炮姜、それから附子を加えてやりますと一層効果が著名になります。それからこの身體が冷え切つて小便に度々行く、今行つたかと思ふと夜中でも小便に度々行くので困るといふ人は十全大補湯を用ひます。よく婦人で消渴といつて來られます、そういう場合十全

大補湯を用い、結核性の膀胱カタルを起こして結核性の潰瘍が出來て居る、痛むために小便にゆきます、一時間に數十回行きます、今行つたと思ふと又行きたくなつて二、三滴、十滴位ポト／＼と出ます、そういう人は十全大補湯に炮姜附子をやりますと藥になります、小便が一時間か二時間になつて來ます。

それから十全大補湯に荊芥を加へまして脱疽といふ病氣があります、足の尖きから腐ります、拇指が腐つて放つておきますと血液の循環がわるくなつて足全部が腐つてくる病氣があります、その時最初に十全大補湯に荊芥を加へたのをやりますと痛みも止りますしそれ以上に進まない、そういう効果があります。使ひ様によつては十全大補湯は恐ろしく効果のあるものであります。

(六) 補中益氣湯 (ホテウエキキタウ)

古の至人陰陽の化を窮め、生死の際を究め、著す所の内外經に悉く言ふ、人は胃氣を以て本となすと蓋し人は水穀の氣を受け以て生く。所謂清氣、榮氣、運氣、衛氣、春升の氣は皆胃氣の別稱なり。夫れ胃

は水穀の海たり、飲食胃に入り精氣を遊溢して上は脾に輸し、脾氣は精を散じて上は肺に歸し水道を通調し、下は膀胱に輸し、水精四布、五經並行四時に合し、五臟陰陽撥度以て常をなす也。若し飲食節を

失し寒温適せざれば脾胃乃ち傷き喜怒哀恐元氣を損耗す。既に脾胃の氣衰へ元氣不足すれば心火獨り盛なり、心火は陰火なり、下焦に起り其系を心に繋ぐ。心は令を主らず相火之に代る。相火は下焦包絡の火、元氣の賊なり。火と元氣とは兩立せず、一勝てば則ち一負く。脾胃の氣虚するときは則ち腎に下流して、陰火得て以てその土位に乗ず、故に脾證始て得るときは則ち氣高くして喘し、身熱して煩す、其脈洪大にして頭痛、或は渴止まず、其皮膚風寒に任へずして寒熱を生ず、蓋し陰火上衝すれば則ち氣高く喘して煩熱し頭痛をなし渴をなして脈洪なり。脾胃の氣下流して穀氣をして升浮するを得ざらしむ。是れ春生の令行はれず則ち陽以てその榮衛を護ることなきときは、風寒に任へずして乃ち寒熱を生ず、此れ皆脾胃の氣不足の致す所なり。然り而して外感風寒得る所の證と頗る同くして實は異なる。内脾胃を傷けば乃ち其氣を傷く、外風寒に感ずるときは乃ち其形を傷く其外を傷くるは有餘となす、有餘は之を瀉す。其内を傷くるは不足となす、不足は之を補ふ。内傷不足の病苟も誤り認めて外感有餘の病となして反つて之

を瀉するときは則ち其虚を虚するなり。實を實し、虚を虚し此の如くして死する者は醫之を殺すのみ、然るときは則ち奈何せん。惟當に辛甘温の劑を以て其中を補ひて其陽を升し、甘寒以て其火を瀉すべし則ち愈ゆ。經に曰く勞する者は之を温め、損する者は之を温むと。又云ふ、温は能く大熱を除く、大に苦寒の藥を忌むと、其脾胃を損すればなり。脾胃の證始めて得るときは則ち中を熱す。今始めて得るの證を治するの方を立つ。

- 黄 芪 病甚しき勞役甚しき者一錢
- 甘 草 己上炙各五分
- 人 參 微を去る、嗽ある者は之を去る三分
- 當歸身 二分酒焙乾或は日に乾し以て血脈を和す
- 橘 皮 二分或は三分
- 升 麻 二分或は三分
- 柴 胡 二分或は三分
- 白 朮 三分

右件藥、吹咀して都て一服に作つて水二盞を以て煎して一盞に至る。氣弱氣盛を量り、病に臨んで水



蓋の大小を斟酌せよ。粗を去り食遠に稍熱服す。如し傷の重き者は二服を過ぎずして愈ゆ、若し病日久しき者は權を以て加減の法を立て之を治す。

此處へ書き出しましたのは李東垣と申します、元の時代の名醫であります。此の人の書きました醫學脾胃論、此の本に出て居る文章であります。これを此の儘持つて來ました。漢文でありますがその漢文を日本語に書き改めたものであります。

胃氣といふのは今でいふ處の新陳代謝作用と考えれば一番判り易いと思ひます。胃氣を以て本となす、これは榮養物を攝つて、そしてこれを消化して生きてゆくこの新陳代謝作用が生命力の根元であるから胃氣を以て本となすといつたのであります。

この時代には五行を五臟にあてはめて肝(木)、肺(金)、心(火)、腎(水)、脾(土)としましたから土は脾臟の事でありま

す。脾證とはつまり新陳代謝作用の異常から起つてくる病氣のことであり、つまり脾胃の働が弱つた状態であり、そういふ時は此の呼吸が荒くなつてそして息働しくなつて來ます。そして發熱して息切れがします、かういふ場合は脉も洪大して頭痛がして結核の初期の始まりの様であります。茲

いふ意味であります。又外風寒を感じる時は乃ち其形を傷くとありますが形は肉體のことであり、所謂傳染病の様なもので外から病氣が入つて來ると身體を傷けます。生體は病原體の侵入に對して生物反應を起して一般の新陳代謝作用即ち生活現象が異常に昂進して來ます。茲に外を傷けるは有餘となすとありますが、有餘とは生活現象が健康状態の時より昂進した場合を言つて居ります。有餘は之を瀉すとは昂進を鎮靜にすることをいふのであります。

内傷の場合は外感と反對に生活現象が沈衰して來ます、之は身體の働が足りないことであり、不足は之を補はねばなりません、即ち沈衰状態をもつと賦活する、死なふとする細胞に再び生命力を與へねばならぬ、そういふことを補ふといふのであります。

外感有餘の場合は炎症が旺んであるから炎症を除かねばなりません、炎症を除くことを瀉すとかういふ風に言つて居るのであります。反之内傷不足の場合に反對に瀉したならば、弱つて居る處へ行つて益々弱らせる事になります、即ち虚を瀉することになります、又外感有餘の所へ補ふなれば實を實することになります、若しそれで病人を見たらば内傷であるか、外傷であるかを辨別して内傷の時は之を補ひ、外感なれば之を瀉すといふ根本方針を守らねばならないのであります。李東垣先生はこの補瀉として補中益氣湯を作られたのであり

の處は即ち李東垣の發明した處であつて、内傷外感といふものを始めて言ひ出したのであります。内傷外感の二つを辨別したのであります。内傷はつまり先き程書いた通りに、飲食或は勞役即ち非常に身體を使い過ぎたり、飲食の質や量或は方法を誤つたり、身分不相應な慾望を起したり、そういふ事によつて身體の働が變る。唯物が變れば身體の働が悪くなりそれがつもと體質が悪化します。又體質に相當する以上に過度に身體を使ひますなれば身體を壞す事は分りきつたことであり、それから余り分に過ぎた慾望を起すと精神や神經をいためて、引いては肉體の機能を衰へさせ身體を損す、斯様に起つた病氣が内傷であつて、外感といふのは現在でいふ傳染病の様なものであつて、昔の事で病原菌が発見せられてゐない時でありますから風寒濕熱によつて起ると考へられた病氣でありまして、即ち今でいふ處の傳染病チブス、赤痢インフルエンザの様なものであります。凡て病氣はこの二つに分つことができるものであると此處で言つて居ります。

この着眼點が非常にこの先生の偉い處であつて、何等今の病理學の分らない時代に臨牀的にこの様な區別をした事は非常に明析な頭腦の持主であつたことは勿論之が治療上に於ける貢獻は大したものであります。其處に書いてあります通り、その内脾胃を傷けば乃ちその氣を傷くといふのはつまり代謝作用が順調に行かなければ細胞の生活現象が鈍つて來ると

ます、此の前にも申上げたことであり、心火といふそれから相火といふことが茲にも出てをります。吾々の生命の根源はつまり火であります、心火即ち心臓の働が生命力の根源であると考へられたのであります、心臓に火が燃えて吾々の生命が活動出來て居る、かういふ風に考へて居ります、この心火の他に腎臟と腎臟の間に命門といふのがあつて其處から今でいふ處の性的ホルモンが分泌されてゐると考へられたのであります。この性ホルモンは心臓の働に次いで大切なるものであつて健康なる場合にはたへず分泌されて燃へ上らうとする相火を消しとめてゐるのであるが、一旦このホルモンの分泌が止ると相火が燃え上ります。結核性の疾患のときの熱はこの相火が燃へ上るための熱であると解したのであります。蛋白が下りて血圧が高い、即ち萎縮腎の様な時、熱を體温計で計ると熱がない、病人は身體の上半身、臍の上からが熱くて困るのに熱を計ると無い、そういふ時は相火が燃え上つて居ります。

相火を靜めるに六味丸を使ふ、之はまたあとで申上げます。内傷と外感の鑑別の方法は臨牀にはどういふ工合に鑑別するか、例へば發熱であります。内傷の熱でありますと、今熱がさしたかと思ふと間もなく止んで時に發し、時に止むといふ熱の現はれ方で外感熱は熱が出たとしますと、引き續き出て止まない、惡寒即ち寒氣どちらも寒氣はしますが内傷のもの



は火鉢によつて温かくしますとその寒氣はとれます。

外感の方はいくら着物を着ても火鉢にあたつても寒氣はとれない、病氣の癒らない以上はとれない、まあこういう區別があります。

内傷は強い風にあつても寒くはないが、一寸隙間洩る風に當ると非常に寒い、外感の方は一寸した風でも寒さを感じる頭痛に致しましたも内傷の方の頭痛は頭が痛んだり又止んだりしますが、外感の方では痛みづめであります。

外感の方の頭痛は御承知の通りに病ひの表裏内外でわけて居ります、病が表にある裡は痛みますが、裏の方即ち消化系統に入つて行きますと頭痛はとれてしまふ、表裏といふのは吾々が病氣にかゝると最初は身體の表層部に病氣がつかまふ病氣がつくのでなくて病的反應が身體の表層部に現はれて來ます、寒氣がします、之は皮膚の表面に粟粒が生じます、だから之を表といひます。

古くなつて來る、病が古くなりますと病氣に對する身體の反應が内部に現れて來る、即ち裏に進みます。例へばチブスであります、極く始めは風邪の様で寒氣がして節々が痛くなつて病的反應が表層部にあります、病がすゝんで來ますと頭痛寒氣はなくなつて、口の中が燥いて大便が出にくくなりそれがために譫語などを發し惡寒の代りに却つて身體を熱がるといふ風なそういう微候を現はします、即ち病は裏に入つ

て來たのであります。

斯様に外感の場合は病が表にある内は頭痛があるが、裏に入ると頭痛はなくなります。内傷の頭痛は起つたり、起らなかつたり色々變ります。一般の状態は内傷は身體一般がだるく特に手脚のだるい事が特徴であります。眠いです、いくら寝ても眠い、御飯を喰べると間もなく眠い、電車に乗つても居眠りするやうな人は内傷の傾向のある人でありました。ところが外感の方ですと身體の節々が痛む、呼吸でも内傷の方は非常に呼吸が短かい。外感の方では喘息の様な呼吸となりません。それから熱ですが、手足を觸りますと内傷の方は手の掌の裏がさはりまると熱くなります。處が外感の熱の場合手の掌、脚の裏はあつくならないが手の甲、足の甲があつくあります、そういう差違があります。一般に内傷の方は言語動作起居動靜が鈍い、そして食慾なくて何を喰つてもまづい。外感の方ですと始めのうちは割合に食物はたべられます。最初のうちは大小便も變らない、そういう様なものであります。

治療の方針になりますと内傷の方は所謂補ふ、或は温めるのであります。外感の方は汗吐下の方法によつて病氣を癒す。内傷と外感は今醫學の智識があると割合に容易に鑑別できるが、病理解剖の智識のなかつた當時では随分見誤つたに違ひないが、大體上述の様に鑑別したものであります。

要するに治療方針が全然反對なのでありますから、鑑別を誤らない様にしないといけない、それでないと遂に病氣を悪くしてしまふ、それから外感の方は補劑を用いては益々悪くしてしまふ。此の補中益氣湯をつくられた主旨は、内傷外感を區別して内傷は沈衰した細胞の働きを昂奮させる爲に今申上げた様な藥を用いたのであります。脾胃の力即ち胃腸の働きが鈍りますと従つて呼吸器の機能も感く結核菌などに侵され易くなります。皮膚呼吸、肺呼吸、主として皮膚の働きを調節して呼吸作用を完全にさせる爲に黄芩を最初用いたのであります。黄芩をいれて皮膚の働きを調節する様にして、皮膚の方は黄芩によつて機能の恢復を圖るが、肺の働き例へば呼吸が短かくなつて息どうしくなる事を防ぐ爲に人參を用いたのであります。處で心臓と肺の働きが鈍れば腎臓の働きが昂進して來ます、腎臓の働きを沈靜させる爲に甘草を用ひて居ります。

それから又同時に甘草は胃腸の痛む場合緩和の爲に甘草を用ひて居ります。白朮を入れて胃中の熱を除き、それから腹部の血行をよくする、こういう作用を努めさせて居ります。それから升麻と柴胡は所謂沈靜する細胞の働きを常に引き立てる、鼓舞して引き立てる、だん／＼消えかゝる火を燃え起させる働きを持て居ります。當歸は一般の血行をよくします、橋皮は血中の働きのつま

つた氣を取り去らす、そういう働き、作用があります。そういう目的に副ふやうにこういう薬味で補中益氣湯といふものを李東垣先生はつくられたのであります。それで次に加減の方を簡単に一、二申上げます。

大體この補中益氣湯を用ひます目當を申上げますと、さき程申上げた通り今でいふ慢性の病氣であつて一寸見た處は元氣がない、物事に倦みやすい、疲勞しやすい、疲れ易くてそして氣分がふるはない、よく眠たがるといふ風な症状が目當であります。

以上の症候の上に腹が特別よく痛む場合には芍藥、甘草を更に加えます、芍藥五分、甘草五分であります。冷氣を伴つて同時に腹の痛む場合、桂枝、肉桂を三分か一分加へます、頭痛の劇しい場合には蔓荊子、川芎、蒿木、細辛、この四味を加へます。それから熱には補中益氣湯に大芩麥門冬、五味子を加へます。

處でこの麥門冬、五味子それからこの人參、この三味合したものを生脉散といひます、脉を生ずる薬といひます。補中益氣湯の事を醫王湯ともいひますから、補中益氣湯に麥門冬、五味を加味したものを醫王生脉ともいひのであります。

補中益氣湯は色んな病氣に利用されまして、慢性病で身體がだるくて困る、眠くて困るといふ微候が現はれて來ますと補中益氣湯を加減して用ひます。



先づ中風の場合麻痺が現はれて来ますと、補中益氣湯に防風、羌活、天麻、半夏、南星、木香、これだけを加えます。普通手足の麻痺の場合、それから言葉の言い難い場合涎體に故障を起して言葉の出にくい場合は石菖蒲、竹瀝を加へます言葉の出にくい場合顔面神経の麻痺した場合であります。

顔面神経の麻痺して来る場合片方だけ甚どく麻痺して来る場合、そういう場合には乾姜、黄連、羌活、防風、竹瀝、荆芥、生薑、顔面神経麻痺の時に現はれて来た中風であつて、それからあの顔面の麻痺に手足の指先が動かないといふ中風には附子、羌活、防風、木香、麥門冬これだけ加えます。こういう風な加減で、勿論中風の薬はこれだけでないが、中風であつてそして補中益氣湯の症が現はれて居る場合、この薬を用ひてやつて行きます。

次に咳嗽、咳の出る場合久しく慢性気管支カタルがあつて一向咳が止らない。或は結核性であつても結核性でなくても慢性の咳嗽の癒らない場合、矢張補中益氣湯を用ひてよく癒る、勿論補中益氣湯の症が現はれて居る場合でありますが、そういう場合麥門冬、五味子を加えます祛痰沈靜作用がある或は知母、黄柏、黄芩、瓜蒌仁を加味すると熱のある場合はよろしい、これを用ひますのは咳嗽が長く續いて同時に性的ホルモンが足りない場合に好いのであります、通常六味丸を應用してこのものにこれを用ひます。知母と黄柏とは性ホル

モンの分泌を盛にして内傷の助けになる様であります。それから次はマラリヤであります。瘧疾は仲々癒らない場合が多い、最初に巧く手當をすれば癒ります、キニーネをやつても癒らない場合はこぢららせて癒らないといふ場合には矢張補中益氣湯に半夏、芍藥、黄芩、大棗、生薑これを加えて與へますとよく癒ります。それから次に痢疾、下痢を現すに漢法には痢疾といふ言葉と泄瀉といふ言葉とあります。痢疾とは細菌性の下痢であります、泄瀉は加答兒性的下痢をいひます。

細菌性の下痢とは赤痢、疫痢、細菌性腸炎等でありまして是等は痢疾の方へ入ります、それで例へば痢疾でつまり赤い血の様な大便を出す、しぼり腹になる、便所に何十回となく行つて、腰が冷え切つて立てない場合、御飯も何も慾しくなくなつて身體が疲れてしまふ場合には此の補中益氣湯で元氣を恢復します。この場合は柴胡を去りまして、即ち

去柴胡、加芍藥、澤瀉、木香、縮砂、白豆冠、地榆、それから此に米を加へます。醋につけて炒つた米、米と一緒に入れましてやりますと、赤痢で長く患つて居るやうな場合によろしい。余談であります。禁口痢と言つて飯がたべられない自然他の何もたべられない様になつて来る、そうした時、米といふものは難有いもので、二年三年とかこつてある米を煎じて吞まします。そういう米はビタミンも何も無い、自然に

ビタミンも何もなくなつて居る、そういう古い米を煎じて重湯にして服させますと食欲が出て来る、そうすると最近やかましいビタミン説もまるで當てにならない、かやうな古米を陳倉米といひますが即ち陳倉米で重湯を搦つてやります。

次に泄瀉の方であります。下痢即ち加答兒性的下痢が何時迄も續くと身體はよわつてしまふ、毎日々々下痢して居ると御馳走を食つてもよわつてしまふ、たべたもの其の儘出てしまふ、これを米のまゝ出るといふので完穀下痢と申します、たべたものが消化されてゐない、それで身體が瘦せてしまふ自分の身體が重くて仕様がな、手足が抜ける様にだるくなつて来る、顔が腫れて来て手足も腫れて来る、そういう様に甚しくなつて来ます。そういう時には補中益氣湯に當歸を減じて半夏、芍藥、茯苓、澤瀉、それから山藥、蓮肉、木香、炮姜これを加えてやります。炮姜はお腹の中を温めます、血液の循環をよくします。次に瀰胃といふのがあります、瀰胃は幽門痙、幽門狹窄を總稱するのであります、其他嗜腸、食道狹窄、食道痛などの場合に補中益氣湯を用ひますことが出来て来ます。

こういう場合は補中益氣湯に升麻、柴胡を去つてしまつてその代りに半夏、茯苓、芍藥、枳實、神麩、黄連これだけを加へますとよろしい場合が多いのであります。吃逆、この場合柿の蒂の如き鎮靜劑をやつて見ましても止

まらぬ場合は補中益氣湯に生脈散を合し、更に黄柏或は附子乾姜陽性の薬を持つて行くわけであります。吃逆で困る場合は往々あります、手術の後で吃逆の爲外科醫が困ります。此の場合補中益氣湯を加減して用ひますと間もなく止ります。死ぬ場合よく吃逆が出て来ます、そういう瀕死の時吃逆は止ります。蓋した天命如何とも仕方のないものであります、放つておけばシャツタリの爲めに苦しむ様はとて見えて居られない位辛そうです、それで吃逆はとまりすからして當然な生命であります。薬に終らせる事が出来ません。

次に痞滿つかへる、たべたものが聞える、痞滿のうちでも色々あります。普通に極く普通のものは慢性の胃カタルであつて、胃液の分泌がわるい、胃液の分泌が少ないから脈がそういう人は非常に緩やかであります。斯様な人は大抵多少慢性の気管支カタルを伴つてゐる爲に痰をよく出します。そういう場合補中益氣湯に半夏と黄連を加へますと非常に感觸されます。

次に便通のわるい、便秘で便秘しやすく支へる、大便が二日三日出ない、たまに行つても快通しない、中年以後の婦人に多いのであります。そういう人、そのために痞える人は矢張り補中益氣湯に黄連、桃仁或は大黃或は當歸を配合する、全部一緒に加へてもよろしい、そういう風にしますとだん／＼とよく支へがなくなります。御飯がいくらでも口におい



しくてそれでたべると痞へる、口ではよくたべられてあとから困るといふ人、そういふ人は身體がだるくて眠い人であり

ます。矢張補中益氣湯に枳實、黃連を加えます。それから胸元が痞へて腹が張つて困る人は、補中益氣湯に芍藥、縮砂、五味子それから又厚朴、枳實を用ひてもよろしい、胸が痞へて腹が張つて困る人、そういふ人でありま

す、それからお腹が痞へてお腹の中の冷たい感じの人、そういふ場合には黃連と附子を加へます。それから又胸元が痞へて嘔氣があることがあります、かやうに嘔氣のある人は黃連陳皮、生姜を加へて用ひますと非常によくききます。次に水腫即ち腫れる病氣内傷によつて水腫を來す、慢性的の病氣があつて手足が腫れます、今でいふ腎臟炎、心臟病或は肝臟の病氣の爲に身體が腫れます場合、そういふ場合で補中益氣湯の症候の現はれて來る時、補中益氣湯に芍藥と茯苓、澤瀉、厚朴、枳實、藜蘆子、生姜それだけ加へてそして同時に八味丸を應用する、勿論水腫には色々他の藥がありま

す。始めは水腫特有の藥を用ひますが、癒らない場合に補中益氣湯加減を用ひます。身體がだるくなつて昏々と眠る場合補中益氣湯にこれを加へて用ひますと吃驚する様な場合がありま

す。次に積聚といつてお腹に塊りのある場合、つまり塊りがどういふ原因であつても例へば痞の様なものでも積聚、脾臟、

藥、大棗、生姜これだけを加へます。

話は余談に入りますが肺病の病人に芋粥といふものを喰はせませす、此の芋粥の芋は山藥であります。二合の米に五勺位の糯米を混ぜます、其處へ十匁位の山藥を入れてまして、矢張十匁の芡實、これは鬼蓮の實であります。かうして粥にして喰べさせますと元氣が出ます、芋のあま味が出ておいしいものであります。これを朝一回喰べさせまして非常に元氣になります。結核患者にはよき食物の様に思はれます。

それから吐血の場合であります、大して澤山血が出るとは言へないがいつまでも癒らない、そういふ場合には補中益氣湯に麥門冬、五味子を加へましてそれに山藥、地黃それから茯苓、遠志それから痰や咳を伴ふ咯血には矢張醫王湯に麥門冬、五味子、山藥、茶葉、貝母、茯苓、これだけ加へます。

それから次に肛門からの出血であります。之を便血、これは非常に身體の弱つた人、大便の度に血が出る、そういふ場合に補中益氣湯に阿膠、椿根皮、地榆、槐花これだけ加へます。それから汗、汗症でも矢張補中益氣湯を用ひねばなりません。調合します、絶へず汗が出て止まない、大體結核性の病氣があつて汗が出る場合、補中益氣湯に升麻、紫胡を密につけて焙りまして用ひます。それに附子、麻黃根、浮小麥を加へます。

眩暈、めまひする場合で補中益氣湯の症が出て來るときが

肝臟の肥大でも積聚と言つた様であります。游走腎と申しまして腎臟が動くのも積聚に入ります。

慢性的の腹膜炎が癒着した場合も積聚であります。鑑別はむづかしいが、お腹の中に塊りがあつてそして顔色が貧血して身體は瘦せてそれから手足がだるい、一向食欲がないといふ場合には矢張此の補中益氣湯の升麻を去りまして、即ち升麻それに半夏、枳實、厚朴、茯苓、山査子、大棗、生姜、これだけ加へて用ひます。

それから次に黃疸であります。癒し損ねましてどうしても癒らない、そういふ場合補中益氣湯の力を藉りまして巧く癒ります、少し慢性になりますと皮膚の色が濁くなつて來ます。矢張熱のさし引きがあつて食欲が一向出ない、手足がだるくて困る、そういふ場合は矢張補中益氣湯に四苓散即ち猪苓、澤瀉、茯苓、蒼朮、これを四苓散と言ひます。これに加へて更に茵陳、梔子、黃連、生姜を加へる即ち補中益氣湯に四苓散を加へて更に此の四味を加へます。

次に虚勞であります、絶えず咳が出て來る、痰が出る、盜汗が出る、一寸身體を動しても汗が出る、息どういふ熱がある、息どういふ聲が出ていくといふ如き場合には補中益氣湯に黃柏、天門冬、麥門冬、五味子、杏仁、黃芩、瓜蒌仁、それから又同じ虚勞であつても咳や痰より胃腸の方のわるい腸結核の始まりの様な場合は升麻、柴胡を去つて加蓮肉、山

あります。これには補中益氣湯に川芎、天麻、梔子、竹瀝これだけ加へてやります。

それから遺精、夢精です。これには補中益氣湯に山茱萸山藥を加へ或は知母、黃柏を加えます。淋病でも補中益氣湯を用ひます。私も随分患者に使つてみますが淋病は癒りません、もう一つよい成績は得られない。

潰瘍、これは夜尿症のこと即ち寢小便の場合色々あります前に申上げた六君子湯であります、その他色々ありますが矢張補中益氣湯の症で寢小便のあります場合は補中益氣湯に山茱萸、山藥、酸棗仁、益智、芍藥をやりませす。

それから脱肛であります、これは補中益氣湯の柴胡を去りまして柴胡、地黃、芍藥、茯苓、桔梗、乾姜を加味します。それから腰痛であります、矢張補中益氣湯の症を現はす時には補中益氣湯に知母、黃柏、杜仲、牛膝、芍藥これだけを用ひてやります。以上申しました様に補中益氣湯は非常に應用範圍の廣いもので、まだく應用は多數あるのであります。重なる處は大體申上げました通りであります、これを自由に應用出來たら大したものであります。矢張補中益氣湯を基本的徴候としては大體今申上げた様な疲れ易い事、従つて眠氣がしやすくて一向何事にも興味がなくなつて億劫がるといふ様な事、そういふ事を目當にして行かれますと思ひ當つて來ます、そして巧く掴まへて以上の加減をしますと割合効果が現はれ



ます。恰度時間が来ましたからあとは質問に致しまして今日

はこれで打きます。

### (七)六味丸(ロクミクワン)

夫れ人の生は腎を以て主となす。人の病は多くは腎虚に由つて致すものなり。此方は水を壯にし火を制するの劑なり。若し腎虚して發熱渴をなし小便淋閉、痰壅り失音咳嗽吐血、頭目眩運眼花耳聾、咽喉燥痛口舌瘡裂し齒堅固ならず、腰腿痿弱五臟虧損し自汗盜汗、便血諸血、凡そ肝經不足の症尤も之を用ふべし。蓋し水能く木を生ずる故なり。此れ水泛んで痰となるの聖藥、血虚發熱の神劑、又肝腎精血不足して虚熱床に起つこと能はざるを治す。

熟地黄 八兩  
山藥 四兩  
山茱萸 酒蒸棗ヲ去リ肉ヲトル四兩  
牡丹皮 去骨三兩  
白茯苓 去皮三兩  
澤瀉 去毛三兩

右諸藥を精製し秤つて一處となし、石臼内に入れ杵搗して餅の如く爛らし、日光或は微火にて乾燥したる後磨つて細末となし、煉密に水を加へ和して丸となし梧子大の如くして毎服百丸、空心白湯にて下す。塩湯或は酒俱に可なり。

(以上森田博士テキスト朗讀)

これは要するに現今でいふ性的ホルモンの分泌を旺にする薬であります。

これは錢仲湯といふ人が、金匱要略に出て居ります處の八味丸の内の桂枝と附子を抜きまして作つた處方でありませう。それで六味丸は腎の中の眞水を補ふ目的でもつて使用され居ります。漢法では腎臟と腎臟の間に命門といふものがあるかと考へて居ります。命門では火が燃えて居ります、一方腎臟からは今の醫學でいふ所の性的ホルモンが分泌されておますが、このホルモンを體內で有効に働かせる機能を命門の火といつてゐるわけでありませう。

機能作用と分泌物體を別に考へて居るわけでありませう。そ

んな風で腎臟の方では水が出来まして、命門には火が出来てくる。此の火と水の分量が一致しますれば身體の調節がとれます、とかう考へて居ります。然るに水が出来ても火の出来ない人があります。またその反対の人があります。

例へば陽虚の人は火が出来ないで、水だけ出来ませう、陰虚の人ですと火は出来ませうが水が出来ないのであります。

そんな場合で陽虚も、陰虚も勿論病氣であります。つまり西洋醫學ですと、例へば性慾が衰へますとホルモンの注射をやります。ホルモンの注射は水を補ふ、單に水だけ補ふ。陰虚の人はホルモンの注射をすれば性慾が元の様に恢復します。陽虚の人がホルモンの注射をしても駄目です。陽虚の人はホルモンは十分あります。陽虚の人といふのは外觀はよく肥つた色の白い皮膚の色艶が青白い。そういう人が陽虚であります。一見如何にも精力的で健康そうですが、性慾が全然ない。そういう人はホルモンの注射をして利かない。つまり水が足つて居りますが火が燃えて居らない。それがなめにかういふ人は火を燃やしてやらねばならない。漢法ではかういふ風に陰陽を區別して實際に應用してをります。

此の水と火が平衡すべきものでありまして水一の場合火も一であれば自然であります。水が少しでも増えてもいけない。火が増えすぎてもいけない。火が多くなりますとつまり陰虚になります。すると身體の火が燃え切つて、身體に熱を

覚えて腰から熱い感じが起つて来ます。それが陽虚の人であります。火が燃えて起らない代りに、水が多いから腰から下が冷えやすいのであります。腎から生ずる水が少なくて火が非常に燃え上る場合は陰虚火動といひます。

それで年寄りますと普通陰虚火動になつて性ホルモンの分泌作用がなくなつて少しの事にも火の方が燃え上ります。身體を使い過ぎますと、腰や脚の方が熱く感じます。かういふ事が起つて来ます。若い者がかういふ風になりますとよくよく警戒せねばなりません。それが今でいふ結核性の極く初期に起ります。西洋醫學ではかういふ事は注意しないが、漢法の方では一寸過勞しても熱が熱くなります。腰の方又腰の方へかけて熱くなり、ほめて来るといふ時は陰虚火動が起つて居るのであります。それを打捨て、をけばだん／＼病氣が重くなつて咯血して来ます。陰虚火動を最初に癒せば肺病にはならない、そういう時に六味丸がよく利きます。六味丸中に含まれて居る地黄であります。地黄は要するに陰中の陰であります。陰の勝つたものであります。此の地黄によつて陰水を補はれるわけでありませう。水を補ふ事は結局腎液の分泌を旺にする。この地黄を六味丸は君藥として用ひて居ります。大量を用ひて居ります。山茱萸も味は濃厚であります。濃厚であつて同時に酸味を帯びて居ります。だから肝臟に働きます。木(肝)、火(心)、土(脾)、金(肺)、水(腎)を五行といひま



す。五臟を木火土金水に當て嵌めて居ります、そしてこれはお互に相生して行きます。酸味のは肝臟に働きます。山茱萸なんかは心臟に働くと同時に肝臟に働きます、肝臟は腎臟の子になります。かういふ風に漢法では説いて居ります。

それから山藥であります。味が甘い、甘いものは土即ち脾臟に働きます。そうしますと脾臟はどういふ作用かと云へば土はよく水害などに堤防を作つて防ぎます、だから腎臟の働きを土によつて助けます。水分の代謝を促します。山藥は土に働き脾臟の働きを助けます。茯苓も矢張同じ利尿劑であります。矢張味が甘くないが甘に屬する山藥と同じ働きを致します。そして山藥に比して茯苓は色が白い。金屬は一般に鐵色と言つて色が白い、鐵もアルミニウムも白い鐵色であります。白い事は金に通じます、つまりそれが肺に通じます、同時に肺を養ふと解します。肺病の藥に山藥を使い、山藥のお粥を喰べさせますと肺を強くします處の力があります。肺といふのは今申上げました金が水を生ずる、心臓から言へば肺は心臓の母であります、親子の關係であります。山茱萸の方は肝臟と腎臟と同時によくなる。牡丹皮は性が寒であります味が苦くて辛い。苦辛、だからして寒では熱を引き下げ、苦い味はよく血分に働き、辛いものは水を沸かせる作用があります。即ち血液の循環をよくして熱を下げる、かういふ意味もあります。瘀血を一箇所に停滯したものを循環さ

せ利尿作用を促がす、かういふものらしい。その次の澤瀉は味が甘くて、そして性は鹹、矢張冷たい感であります。でこれで見ますと六味丸は水分の代謝を調節するかういふ意味の藥で成立つて居ります。では實際どういふ場合に使ひますかと謂へば、先づ第一に房勞、性慾の過度です。その爲に痰が出る。そういふ場合に六味丸を用ひます。その次は矢張精液の分泌が足りない爲に咽喉が渴き、西洋醫の方では種々理由をつけますが、漢法では精液の分泌が出来ない場合は咽喉が渴きます、水が足りない。此の水が生じない爲に咽喉が渴きますと解するのであります。糖尿病などの渴きも此の水が生じない爲であります。

それから骨の發育が弱くてそして手足の殊に脚の方の力のない場合、六味丸を用ひます。子供の脚の發育の悪い歩きかけの子供が歩き方の下手の場合六味丸を用ひますと著効があります。その次に淋病を、老淋即ち慢性の淋病が六味丸で癒ります場合があります。それから中風に六味丸を用ひます。腦溢血の爲に半身不隨、一本の手、一本の脚が所謂單癱と申しまして、片方だけ動かなくなります。或は此の半身不隨で片方だけ全部動かない、顔面神経麻痺を起した場合、それから延髓麻痺の爲に物が言へなくなつた場合、そういふ場合皆んな六味丸を用ひますと仲々よくきゝます。

それから次に膀胱炎、現在の言葉では膀胱腎盂炎、その場合には矢張六味丸、此の場合熱が烈しい爲に、知母と黃柏を加えて知柏六味丸と、かういふ風に調ふて居ります。これは非常によく効く藥であります。婦人に多い病氣でありますすが可成りよく効きまして熱が下つて來ます。それから結核性の膀胱カタル、或は腎臟結核をやつて居ります時に、或は結核性膀胱カタルが合併して居ります、そういふ場合熱が出て小便の度に痛み或は血液が小便の中に混る場合、知柏六味丸に、琥珀、海金砂を加へてやりますと相當よく効きます。そして痛みもすつかり止ります。血尿も癒つて來ます。

漢法には肝虛といふ言葉があります。これはどういふことかと申しますと、つまり肝といふのは神経系統の働きを肝と言つて、神経系統の働が昂ぶると肝が昂ぶる、神経系統の働が鈍ると肝虛と申します。眼の力が薄くなりまして耳が聴えなくなり、非常に物事に怯びえる脅迫觀念に捉はれる、それから手足の力が鈍る様になります。それからこの肝虛の人は顔の相が陰慘で、何時見ても悲壯な顔をしてゐます、そして脈は強、細、數で力なくなり、結核の初期に肝虛の症候が現はれて來る事があります。かういふ場合には、此の肝臟の母である腎臟を補つてやれば自然に肝臟の作用が恢復して來ます。かういふ意味で腎臟を養ふ六味丸を用ひて癒します。

次に所謂陰虛の症であります。陰虛の症は一才一般的に言へないが、身體は如何かと云へば瘦せ形で全體的に見ましても皮膚の艶は悪く、顔色蒼白でヒョロ長い、舌を見ますと、舌は紫色で苔のある場合とない場合がありますが、チアノーゼの淡いもの、暗紫色と申しますが左様な色調を呈してゐます。ですから舌を見ただけですぐ判ります。かういふ陰虛の時は六味丸を用ひます、この場合咽喉を渴かして困ります。冬の寒い時でもいくらでも水を飲みたがります、その時は六味丸に麥門冬に五味子を加えます。

麥門 三兩 五味子 二兩を加へます、これで止つてしま

います。それから陰虛の症で腰痛であります。腰痛を訴へて來る場合には、當歸 木瓜、續斷 鹿茸を加へます。陰虛性の腰痛はすぐ癒ります。それから小便の淋瀝した場合には此の澤瀉茯苓を倍加して用ひます。そうしますと小便がすぐに出るやうになります。それから老年になりまして腎虛が來て夜中に度々小便に行きます。十時に就寝しましてそれから十二時一時ぐつすり寝ていても一時間毎位に小便にゆく、これは若い人にもありますが老人には比較的多いのであります、そういふ場合に六味丸に益智仁を加へて澤瀉を全然除去つて茯苓を半減します、即ち澤瀉を取去つて益智仁を加へてやります、そうしますと



よろしいのであります。  
それから遺精であります、精液を洩らす場合があります、そのときは六味丸のうち澤瀉を取去つて牡蠣を加へます。陰囊水腫といふと子供などにもあります。礬丸が腫れます、こ

### (八) 八味丸 (ハチミクワン)

八味丸は六味丸に

肉桂 附子 各々一兩づゝ加へたものであります。

六味丸の場合は今申上げた命門の火と腎臓の水即ち、腎水の虚した場合に用ひましたが、八味丸の場合は水火共に虚した場合、八味丸によりまして火と水を調節するわけでありませぬ。

桂枝と附子は肺の働きを補ふといふ力があります。

八味丸は矢張先き程申しました通りに張仲景の金匱要略に記載の處方でありませぬ、これは五箇條に出て居ります。

第一番目から申します

一、虚勞 腰痛 少腹拘急 小便不利者八味腎氣丸之を主る。

二、夫れ短氣は微飲あり、小便より、之を去らしむ

れの初期には六味丸に牛膝 車前子をやりますと癒ります。六味丸はそれだけに致しまして六味丸に加減したものについて申上げます。

べし、茯苓朮甘湯之を主る。

腎氣丸(八味丸)も亦之を主る。

三、男子消渴、小便反つて多く飲一斗を以て小便一斗する者、腎氣丸之を主る。

四、問ふて曰く婦人の病飲食故の如く炊熱臥すことを得ずして、反つて倚息するものは何ぞや 師の曰く此を轉胞と名づく溺することを得ざるなり胞系了戻するを以ての故に此の病を致す、但し小便を利する時は則ち癒ゆ腎氣丸之を主る。

水分の新陳代謝の悪いのを消飲といふ胃の中に水が溜る事微飲は助腹の中に水が溜る事、飲は水排けの悪い事を言いました。動悸は息どうしい、水分の新陳代謝の作用がわるい

ら小便をして水を去らしめ水を出してしまつたらよろしい。男子の消渴は現今の尿崩症であります。現今消渴といひますと婦人の淋病の様でありますが。昔は消渴は淋病ではありませぬ。

水をなんぼうでも飲みたい、何ぼう飲んでも咽喉の渴きが止らない、消渴であります。今で言ふ處の尿崩症乃至糖尿病であります。尿崩症では水を一斗のんで一斗小便をする。子供であつても一日中で水一斗位のみませぬ。そして一斗の小便をする。水をやつて居れば機嫌がよいが十分も待てない。今飲んでも又飲みます。一斗以上のんで結局死にます。これには矢張腎氣丸をやります。

次に、四番目の飲食故の如くは飲食の味は變らない。煩熱は熱の爲に煩はせられる、痰つと寝てゐる事が出来ない。氣息奄々たるもの、これを轉胞といふ、溺する事を得ざるなり胞系了戻する、胞が摺れてしまつて、小便の道が摺れた爲に轉胞する、婦人が妊娠中膀胱の一部が押されて小便が出ない場合又は産後に小便が急に出なくなる、腹の中が空虚になる爲め反つて神経性でそういふ事になります。小便が出ない爲に苦しい、溜りまして出ないので苦しいのであります。

妊婦又は産後に小便の出ない病氣は轉胞と申します。小便を利するだけで轉胞は癒してやれます。

此の四條の外にもう一つ書いてあります、それは崔氏の八味丸と稱するもので、これは宋の林億、此の人が崔氏の言によつて金匱要略の中に書き加へたものであらうと、かういふ事になつて居ります。一箇條

五、脚氣上つて少腹に入り不仁するものを治す。

かういふ藥効があるといふ事が載つて居ります。

要するに八味丸は今申上げた通りに此の命門の火と腎水と共に虚した場合に八味丸を用ひますと非常によいと書いてあります。今の醫學から見ても性慾の全然衰えて居る人、視力迄も聴力迄も衰えて居る人が八味丸を長服します、連服しますと有効であります。

大抵四十歳、五十歳を過ぎますと精力は衰えて、性慾も衰えて來ますが八味丸を連用して居りますと何時までも若々しい氣分で行く事が出來ます。

處がこれを服ませますときに注意すべきは誰れでもそういふ風ない、藥だと説明しますといふと、今の人は如何なる人でも氣の早い人が多いから、一二服で藥効が現れるやうに思ふ、乍し實際に服みかけて一ヶ月、一ヶ月以上しないと効能は現はれない、それだけの注意をして二ヶ月以上服んだものでないといけないのであります。

一服、二服のんだのでは効果はないのであります、第一地黃も大變澤山入つて居りますから、胸が支えて始めはむかつ



き、食慾がなくなつて來ますが、少しこれも馴れますと思くありませんから氣永く續けますと、胸になじんで、いけないといふ事がなくなりませす。それで此の今其處にも書いてありますのは尿崩症であります。水一斗を飲んで一斗小便をするのに用ひますのは勿論であります。

其の他眞性の糖尿病は降糖の内分泌のわるい爲めに起ります。氣を使つたために糖尿を現はす場合、それから亦食餌性の糖尿は甘いものを澤山食べ過ぎた場合、一般に癒り難くて重い糖尿病は降糖の内分泌の欠亡から起つて來ます。此の降糖性の糖尿の内、渴きの強い場合八味丸を用ひますと非常に利いて來ます。

之れはむかし漢の武帝が糖尿で困つて居つた、その時張仲景が漢の武帝の爲めに此の處方を造りまして糖尿病を癒したといふ、曰く付きの薬であります。八味丸ですと糖尿はよく癒ります。私共でも屢々經驗致してゐます。

食餌療法としては肉を進めない、肉食を止めさせて二分搗位の食事で菜食、砂糖は使はない。肉食をさせないと一年で癒ります。此の食餌療法ですと日本人でもよく續ける事が出來ます。患者にきくましても、肉食は仲々日本人は續かない多少はよろしいが御飯が食べたいと言つて病氣が素に戻ります。

八味丸を兼用させて御飯は白米を搗し二分搗の御飯にして

肉は一切やらない。動物性の脂肪を止めて、鰹油、胡麻油、菜食としてやります。果物も一切食さない。お菓子も一切食はせない。かう致しますと可成良い成績が得られるのであります。

糖尿病の外に年寄つて來て神経の働きが鈍くなる爲に小便に行きたくなりませすと直ぐ待つたなしに出る、便所に行く迄に滯れてしまふ、便所に行く間も待つて居られない。そういうふ人に八味丸を用ひますとよく癒ります。

淋病の爲めに小便が出なくて痛んでチビ／＼しか出ないといふ人も癒ります。

それから腰から下の働きの悪い、脚が動きにくい、何と申しますか杖を持つて居つてもヒョロ／＼します。今の醫學で謂ますと中樞神経系統の疾患の様に言ふ場合がありませすが八味丸でよく癒ります。

烏渡した事に疲れ易くて、冷たいものは怒しがらない、温かいものを怒しがらる、口の中が荒れて物をたべさせまてとむせませす。身體のあつちこつちにかさぶたが出來ませす。そういう體質の人に八味丸をやりますと自然に癒つて來ませす。

それから俗にいふたむし、いんきん、たむしは陰囊に濕疹が出來て痒い、濕り易い。冬でも舉丸がチク／＼して居る。そういうふ人は八味丸でよく癒ります、外の薬で癒らないものでも舉丸の濕つて居るものは八味丸でよく癒ります。

脚氣のために腹が張る、下腹の働きが鈍つてしまつてそして更に上に登つて來て息どうしくなつて衝心状態を起して來る場合も矢張八味丸でよく癒ります。下腹が痺れてしまつて心臓の衰弱を起して來る、小便の道が痛む場合、八味丸に更に牛膝 車前子を用ひましてこれを加へまして、牛車腎氣丸といふて居ります。これを用ひますと非常によろしい。心臓がわるい爲めに腎臓がわるく、その爲めに手足が腫れて來るといふ時は牛車腎氣丸でよくとれます。

八味丸は六味丸に桂枝附子を加えたものでありますが、加減八味丸といふものがあります。これはつまり六味丸に肉桂と五味子を加へたのであります。肉桂を一兩五味子四兩を煎薬にすると酸っぱいので丸薬にして用ひます。煎薬にし

(附) 補腎丸 (ホジングワン)

それから六味丸より少し離れて來ませすけれど強精劑でありまして序に申上げて置きたい事は補腎丸といひませす。これは薬味は

- 杜中 二兩 薑汁につけて炒ります。
牛膝 二兩
陳皮 二兩

ますと飲みにくい。

腎虛のために齒がわるくなりませす。漢方は腎臟と口内との關係を重視します。齒と腎臟の關係で齒が爛れる。齒槽膿漏の様なものになる。そういう場合には此の加減八味丸を用ひませす。

口が一般に荒れた場合、咽喉が痛くなつたり、齒が痛くなるとか、齒齦が爛れ齒が痛む缺け易いといふ風な症候に加減八味丸はよく利きませす。

それから糖尿の場合にはよくお腫物が出來ませす。糖尿性の癌か化膿し易い體質になりませしてあつちこつちお腫物が出來ませす。加減八味丸が効果を奏します。六味丸よりも八味丸よりも加減八味丸がよく利きませす。

- 黃柏 鹽を入れた酒に入れて炒ります。
龜板 醋につけて炒ります、各々四兩づゝ

- 夏は 五味子 一兩
冬は 乾姜 五錢加へて丸薬にしたものであります。
杜中 牛膝 黃柏 陳皮は凡て滋陰劑であります。腎水を生ずる品物であります、陳皮は血を環らす機能的のもので旺



盛にする薬であります。

夏は五味子を加へますのは肺の働きの補ひをする爲であります。

冬はお腹の中が冷え易いので乾姜を入れてお腹を温めます。かういふ風にこれは腎臓の働きが鈍つてその爲めに腰の痛み或は脚が非常に力が鈍ぶくなつて手足がだるくなる、甚しい

(附) 滋陰大補丸 (ジインタイホグワン)

これは熟地黄二兩 牛膝一兩 山藥一兩 山茱萸 杜仲 茯苓 巴戟天 五味子 小茴香 肉苁蓉 遠志各一兩 石菖蒲 枸杞子各五錢 棗肉を加へて丸薬とします。此のうち熟地黄 牛膝 山茱萸 枸杞子 杜仲 五味子は

(附) 十補丸 (ジツボグワン)

それから最後にもう一つだけ矢張強精劑で胃腸のよわい爲に折角擧げた食物も身體につかない、その爲に腎臓がよわつて腎虚して来る、それに用ひます薬りで、

附子炮 五味子各三兩 山茱萸 山藥 牡丹 鹿茸 茯苓 桂心 澤瀉各二兩 此はつまり八味丸の附子を炮じて用ひ、そして地黄去を

つて五味子 鹿茸を加へます。これはまあ胃腸のわるい人がだん／＼と腎虚して来る、炮

じて用ひますと最も適當の處方であります。今日は蒸雜でありましたけれどこれだけで終ります。

(九) 調中益氣湯 (チヨウチウエキキタウ)

脾胃調はず、氣弱くして濕を兼ねる者は此方之を主る。

黃耆一錢炙 人參 甘草 蒼朮 柴胡 陳皮 升麻 木香 各五分 右水煎、空心に服す。心を寧んじ思を絶つて薬必ず神効あり。蓋し空心には病四肢にあり、諸脈みな會する故なり。

調中益氣湯で御座います。これは此の前の前に申上げた補中益氣湯に引續いて申上げる筈であつたのですが、強精薬を申上げてからの方がよからうと思ひましたから後廻しにしました。

調中益氣湯は此處に書いてあります通り、脾胃を調へる、脾胃調はずと申しますと、つまりお腹が絶えずゴロゴロ／＼鳴つたり或はよく下痢をしたり、お腹が張る、かういふ症候の時、脾胃を調へる。氣弱くといふのは元氣のないことで、大きい聲で物が言へない、舉動は不活潑で断えず手足がだたるく感じ、疲れ易いといふ風な訴を持つて居る人は氣がよわいといふの

であります。濕を兼ねるのでありますから、どうかすると手足の指が腫れたやうに感じ、脚の甲が一寸腫れて軽い浮腫を訴へる場合であります。處方は其處に書いてあります通りであります。右水煎、空心、お腹の空いた時服す、氣を落つて色んな事を考へて氣を使はないこと、此處の處は一寸漢法の妙でありまして、私にも明瞭に判らないが、經絡のことを意味してゐるやうであります。此の處方は、補中益氣湯の白朮と當歸を去りまして、即ち當歸を多くやりまして下痢を起しますので、その代りに濕氣を去る蒼朮を加へ氣を動かす元氣をつけるとでも申しますか身體の機能を敏活にさせます處の木香を加へます。これを應用する法と致しまして、患者の脈を見るのに、脈には弦脈、或は洪脈、それから緩脈、沈脈とありまして、弦脈といふのは、現代の醫學でいふ速脈波動のきつい奴、弓の弦を制へる様な感じの脈、洪は大きい脈、洪大な脈、緩脈はゆるい普通の人の健康な人の脈であります。沈は低く沈んだ可成強く制へないと感じない。此の氣がよわくなりますと、



即ち氣虚の場合は洪大な脈を現はします。そして脾胃が調はない場合は沈んでゆつくりした脈であります。吾々が食事の後は脈は活潑になります。かういふのを滑脈といひます。御飯をたべてすぐは滑脈で數珠玉が轉んでゆく様な感じであります。御飯前の場合は特にあるかなきかのゆるい脈であります。脈で患者が御飯がすんで居るかすんで居ないかよく分ります。胃腸の丈夫か丈夫でないかも亦脈でよく分ります。胃腸の弱い人は遅緩の脈でおそい「關」の處で強く打たない。中指の處で打ちましても人さし指の處ではよく分らない。馬鹿に低くありまして力がない、そういう場合は胃腸の疾患がある重症の病人でも緩脈で力の強い時は仲々死なないものです。漢法では胃の氣、胃氣が強いとか弱いかいふのであります。胃氣の強い人は非常に壯健なであります。脈はそういうふ風に普通遅緩なる型を現はしますが、他の症候と致しましてはさき程一寸申上げました様な手足が絶えずだるい、甚だしい場合は手脚が痛んで來ます。だるいだけでなくて痛んで來ます。手の掌や足の裏が熱する様に感じます。そして動かし難い。動かし難い時は浮腫のある場合の様であります。従つて身體が次第に重く感じられます。そして心臓部が苦しく息切れて來ます、何となく苦しくなります。矢張そういう場合癢つきなんかわるく熟睡が出来ない、十分睡眠が得られない。口に御馳走を喰べても味が無い、本當の味を味ふ事が出

來ない、體重が絶えず變り忽ち肥えるかと思ふと原因なくして瘦せてしまふ。それからそういう人は夜寝る時に仰向けに寝れない、矢張お腹に力がないお腹がしつかりしない爲めに仰むけになつて大の字になつて仰臥出來ない。横になりませんが、子供なんかうつむきになります。大便秘結したり下痢したり致します。或る場合には膿血便を出す、そういう所から見ますと腸結核、疫痢の場合でも此の薬で癒ります。便に血液、膿を混せて居る場合であります。そして疲れ易い爲めに耳鳴りがよくします、耳が聴えなくなり、物を見ますと目の前に火花が見えます、目が疲れ易く一ヶ所を注視出來ない、目頭を充血させてゐます。そういう場合は、調中益氣湯を用ひます。補中益氣湯は氣力が落つたものを恢復させます。調中の方は、胃氣の調はないものを調へます。何れも胃腸の働きであります。補中益氣湯の方は、身の機能が沈衰して來まして非常に氣不性になります。お肚の工合がわるくて凡てに氣力がふるはない場合は、調中益氣湯を用ひます。調中益氣湯の症候があつて發熱する場合があります。そういうものには地黄と黃柏を用ひます、此の場合の地黄は生の地黄、即ち鮮地黄であります。胃腸が弱いのでありますから、普通の地黄は胃になすましまして不可ない、これを二分、黃柏三分を用ひます。今で申しますと矢張結核性體質のものによく見

られる病氣であります。これは加減の方であります、更に大便を下す場合、調中益氣湯をそのまゝでよろしいが、大便が出難い場合、之は中年以後の人に多いのですが、非常に快通しないそのために何となく氣分がふさぎまして困る場合には、當歸を加へます。當歸を三分から五分、それから此の場合手足が非常に腫れた様で握ると指が太く感じむくみのある場合には、これに茯苓と澤瀉、黃柏各五分と蒼朮を倍に増やすのであります。それから胃の調子がわるくお肚が悪い更に胸の悶える場合は、半夏を加へます。その時は半夏の毒を消す意味で更に生薑を用ひます。それから多少頭痛を伴ふ場合、胃が悪くて頭痛を伴ふ場合半夏を用ひますとよく利きます。お肚がわるくて特に腹痛を

訴へる場合、夏であれば芍薬を加へ三分—五分、冬は乾薑を同じ分量加へます。冬は冷え込みの來る場合であります、胃腸の場合斯様にお肚が痛み多少腸の悪いために熱を出す、そういう場合は黃芩に依つて熱を取る。お肚が痛むと同時に悪寒を訴へる場合、お肚が痛くて寒氣のする場合、桂枝、肉桂の上等であれば尚よろしいが、それから芍薬をばそういう場合には大體用ひるのであります、非常にこの何といふか現代で申しましたならば、肺炎カタルを患つた肋膜炎をやつたといふ人で、現在では癒つたが、いつもお肚の調子がわるくて太れないで身體の疲勞し易い人に服させますと調子がよくなつて肥滿して來ます。病後に肺炎カタルや肋膜炎の恢復期に本方を用ひますと、大變病氣の恢復をよくするよい薬であります。

### (十) 升陽順氣湯 (シヨウヨウジュンキタウ)

脾胃虚弱にして穀を磨せず、胸膈膨脹し、大便瀉泄する者此方之を主る。  
黄耆一錢 半夏六分 甘草二分 草豆蔻四分 神曲炒三分  
升麻、柴胡各二分 當歸、陳皮各三分 黃柏一分 人参三分

右生薑を加へ水煎服す。  
これは此處に書いてあります通りに穀を磨さず、穀物を搗つても消化出來ない、胸膈膨脹しては喰べすぎて腹が張り、大便がいつも軟くベタベタしてゐるといふのです。大體矢張り胃腸の弱い人に襲つて來ます。それが爲めに胃の消化わる



く胸と、腹心窩部が張りまして疲れた感じが著しくなり、すと思ひどしい。秋と冬に限つてよく消化されますが、春と夏が来ると食慾が不振になつて来ます。夏であつても身體に寒氣を覚えて寒むがり易い。だから夏であつても暖かい喰物が欲しく、冷たいものを好まない時の藥であります。

本方も矢張、補中益氣湯を加減したものであります。即ち補中益氣湯の白朮を去りまして草豆蔻、神曲、黃柏、半夏、これだけ加へたものであります。これが俗に謂ふ夏瘦せの藥で

あります。注夏病といふのでありまして、夏になつて食慾なく疲れ易くなつて瘦せる、食慾が不振でありまして春から夏にかけて夏瘦せを致します時のいゝ藥であります。今の醫學から見ますと、これは慢性の氣管支カタル、慢性の胃腸カタルを持つてゐる人に多いのであります。結核性の疾患では殊に多いのであります。此の夏瘦せを目當にして頂きますれば、直ぐ應用出來ます。其の次は升陽益氣湯であります。

### (十一) 升陽益氣湯 (シヨウヨウエキキタウ)

脾胃虛弱にして濕に傷くる者之を主る。

黃耆一錢 半夏、人參、甘草各五分 獨活、防風各三分 羌活、白朮、茯苓、柴胡、澤瀉各二分 陳皮二分五厘 黃連一分

右姜棗水煎して服す。藥を服して後、如し小便し罷んで而も病増劇を加ふれば是れ小便を利用するに宜しからず、當に茯苓、澤瀉を去るべし。如し方に食を喜ぶとも一二日は飽食すべからず、恐くは胃再び傷んことを、藥力尙少きを以て脾胃の氣轉

運升發するを得ざればなり。須く滋味の食或は美食し以て藥力を助け升陽の氣を益してその食氣を滋すべし。慎んで淡食し以て藥力を損じ邪氣の降沈を助くべからず。以て少しく形體を殺して胃と藥とをして轉運升發を得せしむべし。慎んで大に勞役して氣をして復び傷けしむる母れ、若し脾胃安靜を得れば尤も佳、若し胃氣稍々強くば少く食に果を加へて藥力を助けよ。經に云ふ五果を助となすとは是なり。

これは生來胃腸が虚弱であつて濕氣に逢つた爲めに病氣を起して來た、そういふ場合であります。此の胃腸虚弱のため、身體がだるく、手足もだるい、口が渴きまして、それから舌がカサ／＼になつて、飲食の味が無い、大便は調はない小便に行く度数は多くなる、食慾は一向振はない、喰べても消化はしにくい、それから身體は絶えず寒氣がする、顔色は蒼白である。そういふ症候でありまして、結核性の疾患であります。結核の初期は大して咳も痰も出ないで、唯微熱、或は惡寒を訴へる。其の爲め食慾が不振になつて身體が疲れ易い場合に用ひる藥であります。此の藥を飲んで滋養になるものを喰べて榮養を恢復せよとかういふ事でありまして、此のうち加減としては、まあ白朮は濕を漏かす藥であります。だから胃液を非常に分泌します場合、或は炎症があつて痰のよく出る場合には、白朮と半夏で痰は少くなりまして、

胃液の分泌の多すぎるやうなことを起さない力があります。それから茯苓と澤瀉は利尿劑であります。水分の代謝作用が完全になります。羌活、獨活、防風、柴胡はと申しますと羌活と、獨活は血液の循環をよくします。防風は皮膚の働きをよくしまして、柴胡は肝臓の働きをよくします。黃連は苦いから胃腸の熱をよくとりまして、此は氣管の藥でもありますし、胃腸の中に籠つて居る熱をとるのであります。陳皮は胃の働きをよくします。人參、黃耆、甘草は矢張身體をよく補ふ藥であります。芍藥は血液の循環をよくしまして神經を鎮め胃腸の働きを助けて全身の働を恢復させることが出来るのであります。そういふ風な事が先程の効能に現はれて來るわけでありまして、これも矢張肺病の極く初期に用ひます藥であります。

其の次の局方人參養榮湯に移ります。

### (十二) 局方人參養榮湯 (ニンジンヨウエイタウ)

積勞虚損、四肢沈滯、骨肉酸疼、呼吸少氣、行動喘吸、小腹抱急、腰背強痛、心虛驚悸、咽乾唇燥、飲食無味、陽陰衰弱、羸瘦傷感、多臥少起、久しき者は積年、急なる者は百日にして漸く瘦削に至

り、五臓の氣竭きて振復すべきこと難きを治す。又肺と大腸と俱に虚し、咳嗽下利喘乏少氣嘔吐痰涎を治す。白芍藥三兩 當歸、桂心、甘草各五分 陳皮、人參、白



朮、黄耆各一兩 熟地黄製 五味子、茯苓各七錢半 遠志炒心を去り半兩

右剉散とし毎服四錢、水一盞半を以て生姜三斤棗子一枚と共に煎じて七分に至り、滓を去り温服す。便精遺泄せば龍骨一兩を加へ、咳嗽せば阿膠を加ふ甚だ妙なり。

始めの方に症状が書いてありますが、要するに結核性の病氣で、終りの方に書いてあります通りの場合、肺と大腸と俱に虚しとある。之が重なるものであります。肺病で腸結核を冒して来た場合には此の薬は非常によく利きます。

これは此の前のすつと前の十全大補湯といふのが御座います。この川芎を去りまして、陳皮、遠志、五味子を加へたものであります。此の内の人參と五味子であります。これは肺を温めます、五味子は收斂の力がありますから、肺を温めます。黄耆、白朮、甘草は脾胃の力を強くします。陳皮芍薬で肝臟を温めます。地黄と桂心は腎臟を温めます。當歸遠志は心臓を温めます。温めます事は、神経の機能を恢復させ、血液の循環を良くすることでありませう。その内、人參、黄耆、白朮、茯苓、甘草陳皮は凡て補氣の薬であります。それから當歸、芍薬、地黄、五味子、遠志、それは補血の薬であります。だから氣血兩補でありまして、身體が衰弱して血

虚の場合、貧血してそのため身體の働きが鈍つて居る、身體の働き、肺の働き、腸の働きが鈍つて居る場合の薬であります。特に胃の弱い人で地黄を受けつけない人は地黄を去つて用ひましてもよく効きます。それで今先き程申上げました通りに、肺結核、腸結核を同時に出した場合よく効きます。それ程でなくても胃腸が弱くて氣管支カタルが慢性になつて、断えず咳をして風邪を引き易いとか、胃腸が弱くて少し咳べすぎましても下痢をするといふ方に用ひますと、色んな症状痰をとりまして咳がなくなりませう。腸結核なんかで肺々やつて見て助かるまいと確實に言はれる人が此れがためよくならず例を私の方で澤山経験してあります。

加減法としては、胃の弱い人で薬が胸につかえる場合は、地黄を去ります。咳のありますには阿膠を加へますと同時に、麥門冬、紫苑を加へます。熱が高ければ龜甲を加へます。盗汗があつても同様龜甲を加へます。それから當歸は、腸結核によつては去りましてもいいのであります。下痢と同時に痔瘻、血脈の澤山出る場合、その爲めに貧血して眠れないといふ場合、相當よく効く薬であります。それはその位と致しまして、今日は肺病に關連した薬ばかり並べましたが、第十三番目の參朮調中湯は、補中益氣湯のうち升麻、柴胡、當歸を去りましたもので、其處に書いてあります。

(十三) 參朮調中湯 (サンジュツチヨウチウタウ)

痰嗽喘熱して肺脾俱に憊る、者之を主る。

黄耆四分 人參、甘草各三分 陳皮二分 白朮三分 桑白皮五分 五味子二十粒 地骨皮二分 茯苓三分 麥門冬二分 青皮一分

右剉して一劑となし水煎服す。

桑白皮は肺の肺血をとる薬であります、肺循環をよくする薬、肺の中の水氣を取り、肺血をとります。五味子は收斂劑で咳を止める薬、地骨皮は熱をとる薬であります。それから

(十四) 參苓白朮散 (サンレイヒヤクジュツタウ)

脾胃虚弱にして飲食進まざる者、或は瀉し或は嘔する者之を主る。

人參、茯苓、白朮、炙甘草、山藥炒、白朮豆去殼炒、或は姜汁に浸し炒、各四兩、砂仁炒去衣、桔梗、薏苡仁炒、蓮肉各二兩

右共に末となし、姜薑湯に調へ服す。或は煎湯に

茯苓、麥門冬は上へ昇らうとする氣を引き下げます。青皮は肺の働きを活潑にする薬、本方は矢張熱を去り氣を補ふ、熱を取りますと氣分が健かになつて咳のためゼロ／＼といふ肺循環をよくするもの、肺の中の水氣をとります。更に白朮、陳皮、青皮は胃腸の働きをよくして食を進め下痢を止める、矢張これも先き程の局方人參養榮湯と同じ場合よく利きます。參朮調中湯は肺の働きが鈍く、咳痰が多くて、下痢はするがそう甚しくない場合であります。次は、參苓白朮散であります。

作つて効あり。

胃腸の薬であります。此の内人參、甘草、薏苡仁、これは脾胃の働きを活潑にする薬、それから白朮、茯苓は胃を燥かす即ち粘膜の分泌物を少なくしてよくする薬であります。蓮の實蓮肉は心臓を安める薬、精神を鎮靜させる薬であります。山藥は腎臟を強くします。桔梗は、肺或は咽喉の即ち呼吸器



の炎症を去る、かういふ薬があつてあります。  
此の參朮白朮散は、腸がよわくて大した發熱はなく寒氣がない場合、常に用ひますと消化を助けます。だから大病の後には此の薬を用ひますと、恢復を早め、大病の後滋養物をよく摂るために、色んなものを喰べて下痢をする目當に瀉し或は嘔する者と書いてある通り、下痢した場合用ひます薬であります。喰べすぎに用ひます。大病の後にかういふ事が起つて来た時、用ひますのに都合のよい薬であります。それから非常に甚しい下痢、赤痢或は子供であつたら疫痢、何をやつ

(十五) 百合固金湯 (ヒヤクゴウニキンタウ)

肺傷、咽痛、喘咳、痰血を治す。

百合、細甘草生用 芍薬炒各一錢 麥門冬、當歸各一錢五分 生地黃二錢 熟地黃三錢 黑玄參、桔梗各八分 貝母一錢二分

右水煎服す。

つまり肺結核の咽痛であります。咽喉が痛み病氣が尙進みまして喉頭結核を起しかけて来た。そして喘咳はゼロ／＼言つて咳が出る、痰に血が混る目當は咽喉を主にやつて居ります。勿論これは體質は肺病をやる人ですから陰性の體質、陰

でも受けつけないで、全然食欲が起らない、そのみならず水を飲ましても吐き出す、かういふ場合には、此の參朮白朮散に、更に葛蒲、木香を加へまして粉末と致しまして、それを山藥の重湯でもつて服ましますと食欲が起つて来ます。それから此の糖尿病の場合に非常に渴を訴へる、水を飲みたがる時、參朮白朮散に、知母と石膏を加へまして與えますと渴を止める。要するにかういふ下痢を目當に用ひますとよく効きます。

その次は十五番目の百合固金湯であります。

虚症の人に用ひます。陰虚症と申しますと、顔面蒼白で身體は瘦せて居る、これを分り易く例へば腺病質の子供を御覽になるとよく分ります。腺病質でも肥つたものと瘦せた腺病質とあります。腺病質の子供で青鼻をだしたり、涎をだしたり目脂を出す子供は随々と太つてゐます。之に反して身體は瘦せて動作の機敏な小供があります。神経質でありますが學校の成績はよく出来た。かやうに同じ腺病質でも二種あります。この中太つた方は陽虚症で、片方の瘦せてゐるものは陰虚症であります。その目當を大人に應用します、同じ肺病でもポヤツトしたものは割合強い、一方瘦せて骨と皮になつ

て顔色蒼白、おとろえてゐる、太つた者は割合肺病が多い、かういふものは主觀的症候が多い、即ち兎に角文句が非常に多い、見かけは非常に平氣そうであるが疲れ易いので何事も手に付かない。人から見ると病氣らしくないかういふ人は陽虚症であります。

陰虚症の肺病は氣不精でない、そして瘦せて、見た處痛々しそうであります。割合熱も應えない。高熱でも氣にならぬ、仕事も割合平氣で醫者が吃驚する、悪い症候が現はれてゐるが本人は一向平氣で仕事をして居ります、かういふ人です。中には一寸しても腰のだるい人もありますがどつちかといふとかういふ區別があります。陰虚症の人は舌を見ますとチアノーゼ、暗紫色暗い紫色の舌の色をして居ります。かういふ陰虚症で、特に結核で咽喉が多少痛い、痰に血が混るといふ様に言うて来たならば、百合固金湯がよく効きます。あのうち地黄と麥門冬は滋陰劑であります。

陰虚の陰は血液、體液、ホルモン、かういふもの、總稱であります、かういふものを再生する力のあるものを、漢法では滋陰劑、陰を滋ぼす劑であります。地黄なんか典型的の藥であります。玄參は滋陰劑であります。麥門冬も滋陰劑であります。

滋陰劑は身體の物質的方面の恢復を測つて以て熱を下げます。百合は肺の働きをよくして精神を休める。當歸、芍薬は

血液を補ふ。麥門冬も血を増す滋陰劑であります。肺に熱があつて余り乾燥しすぎますと咳嗽が出る、痰が出て乾燥しなげな程度に過らかして置く事によつて咳の出るのを防ぐ、麥門冬は斯様にして肺を潤します、かういふ意味の藥であります。

貝母は痰の分泌を少なくします。桔梗と甘草は咽の藥であります。桔梗は咽喉の炎症をとるに有効であります。此の藥は可成かういふ結核性から来た喉頭結核になりかけの時に、咽喉の痛む患者の咽喉の痛みを止めるのであります。それでも矢張他の症候が昂進して噎れませんが、又そのまゝ良くなつて来る場合も相當あります。これも相當熱がきついと、此のうち地黄、地黄を去りまして、砂參、地骨皮、鼈甲を加へるのであります。結核が進めば骨蒸熱を出します、之は身體の骨の髓から蒸し立てられる様な熱であります、熱の感じを現はして居ります。

骨蒸熱と云きましてコウショネツと讀みます。骨蒸熱の場合には盜汗を伴つて来ます。かういふ時今申しました様な百合固金湯に砂參、地骨皮、鼈甲を加へますとよく効きます。咽喉の痛だけならば樂に止めます、喉頭結核の藥はまだ他にもありますけれど之は可なりよく効きます。

その次は紫苑湯で御座います。







ても汗がジト／＼出て居ります。病人をよく見て居りますと湯氣を出す様に汗が出て居ります。陰虛の方は軟散の脈で、陽虛は洪大何れも豫後不良であります。脈洪大なるものは病の進む徴しと書に書いてあります。陰虛の場合は脈が細數小さくて細く早く打ちます。一分間に九十も百も打つ場合は不良であります。晚かれ早かれ病人は大概助からない、半年後が二年三年持つかどつちにしても助からない事は明かであります。陰虛の人でも緩脈であれば脈だけでもつて大丈夫引受けたいへるのであります。肺虛の時は軟散脈が多い。肺が虚する位ですから胃腸も勞して虚に近いから、食慾が鈍る事

### (十九) 秦艽扶羸湯 (ジンギヨウフメイタウ)

肺痿、骨蒸、或は寒し或は熱し、勞を成し、咳嗽し、聲が嘎れて出でず、體は虚し、自汗し、四肢の倦怠するを治す。

柴胡二錢 秦艽、人參、當歸、鼈甲炙 地骨皮各一錢半  
紫苑、半夏、甘草炙各一錢  
右姜棗を加へ煎す。

骨蒸熱で勞をなし、陰陽共氣血虚した場合に用ひます。それで此の處方で陰陽、氣血、兩虚して骨蒸熱が非常に甚しい

は普通であります。口に霜を嚼むが如く口中が非常に違和であつて口の中に霜をみる様な感じがする。普通寒氣といふのは全身水をかけられた様になります。肺虛の場合は背中の一ヶ所、兩肩胛骨の間だけ寒氣がします。そういう人でも肺湯をやりますとよく効きます。此の處方はよい處方でありますが、虚症の場合に使用すべきものでありますから元氣な患者に用ひましても効かないのであります。虚症であるから身體が弱つてそして咳が出て、力の弱い咳で、そして一向欲がない場合に使ひます。

最後に秦艽扶羸湯であります。

場合によく効きます處方であります。熱が高い場合は秦艽鼈甲、地骨皮も骨蒸熱を去る薬であります。人參と甘草は氣を補ふ。それから當歸は血を増す、紫苑は痰を除き咳嗽を止める。半夏は濕熱を湿かす、痰を少なくしまして同時に聲をよくします。之は高熱の病氣に使ふ薬であります。従つて肺病第三期位になつても非常に力強い薬であります。聲が悪い熱が甚いそういう場合を目當にして用ひます。熱が出て盗汗で全身汗が出易い、そして聲が洞れて来た場合は非常によく効く薬であります。

今日は主として傷寒論の處方のみで御座います。實際に應用して相當日常の臨床に應用出来易いものを持つて来ました

### (二十) 小柴胡湯 (セウサイコタウ)

傷寒、五六日、中風、往來寒熱、胸脇苦滿、默々として飲食を欲せず、心煩喜嘔、或は胸中煩して嘔せず、或は渴し、或は腹中痛み、或は脇下痞鞭、或は心下悸し小便利せず、或は渴せず身に微熱あり、或は效する者は小柴胡湯之を主る。

柴胡半斤  
黄芩三兩  
人參三兩  
半夏半升洗  
甘草炙  
生薑各三兩切  
大棗十二枚擘

右七味水一斗二升を以て六升を取つて滓を去つて再煎して三升を取り一升を温服すること日に三服。

第一番に、小柴胡湯であります。テキストに書いて御座います通り、

此處で重要なことは、往來寒熱、胸脇苦滿、默々として飲食を欲せず、心煩喜嘔、これは小柴胡湯の重要な症候で御座います。往來寒熱と申しますのは、寒い感じと熱い感じとが交替に来るものを指します。今頃の醫學で言ふと間歇熱と申します。一日のうち何回か繰返へして起る熱、即ち寒くなるかと思ふと熱くなるといふ風に西洋風の醫學での熱とは多少意味が違ひまして、主觀的症候を主とした場合であります。胸脇苦滿は、胸から脇にかけて、非常に苦しくて中に物が充満して居る感じで御座います。肋膜炎とか肺炎とかの患者が訴へる様な感じで御座います。

默々として飲食を欲せずは、讀んで字の如く物を言ふ元氣なく默りこんで一向喰べたがらない。それから心煩は、心臓部が息切れて來ますし、胸の中が息切れします。喜嘔は好んで嘔する。むか／＼して困るといふ意味で御座います。

こゝに傷寒、五六日、中風、と言つてありますが、昔の傷



寒とは、今で言ふ傳染病で、腸チブスやインフルエンザをひつくるめて言つたもので御座います。それに罹りまして、五六日経た場合、中風を後に書いてありますが、傷寒論の文章では傷寒或は中風といふ意味で、中風は傷寒のうちで軽い場合を中風と云うて居ります。

此の有熱性傳染病に罹りますと、漢法では、汗の出るの不出ない場合とを厳密に鑑別して居ります。汗が出て居ります場合には軽症であります。汗が出ない場合は、重症であつて薬を與へましても發汗は起つて來ない。薬を與へなくても身體に發汗作用が起つて居ります場合と、薬を呑ませても一向汗が出て來ない、かういふ二つの異つた型を厳密に區別して居ります。身體を觸つて見ると、ジワトリ汗ばんで居るものは軽症で之を中風といひますが、この中風と汗の出ない場合即ち重症の傷寒とを區別して居ります。汗のある事はつまり身體の中に自然に身體の病氣を癒さうといふ働きが起つて居ることを意味するのであります。傷寒論では、汗、吐、下と稱して發汗を促す場合と、或は胃内に溜つて居るものを吐かせ、又は腸内のものを下へ下す、かうして癒すのであります。之を汗して云々、吐して云々、下して云々、と書いてあります。汗をするといふその事自體が癒すのでなくて、實際は薬の働きによつて身體の中に一種の治癒機轉が自然に起つてその結果汗が出て來ますと解するのが妥當であります。つま

り或一つの病氣を癒さうといふ働きが起つて來た證據であります。或は胃が悪い時とか、例へば食物が溜つて居る時、その病氣を癒さうといふ働き、即ち生物作用が起つて來ます。その結果吐くといふことになるのであります。吐く事そのもの吐かせる事そのものが癒す方法でなくて、治癒機轉が起つた爲に吐くやうになるのであります。

下すといふ事は、その事自體が病氣を癒す事ではなく、癒す働きが身體に起つた結果であります。そうでありますから、風邪を引いた時、又腸チブスに罹つた時に、汗が出て居りましたならば、既にお薬を服まないでも治癒機轉が起つて居ることを意味するのであります。それで汗のある場合には、どちらかといふと病氣は軽症であります。反之、發汗を促がす薬を與へましても、汗の出ない時は、其の病氣は重いと斯様に解さねばなりません。特に傷寒論では、既に汗のある場合を中風と稱してゐますが、それは輕症を意味するのであります。發汗劑を與へても汗が出ないのは、容易に治癒機轉の起らないのでありますから、重症であります。之を傷寒と言つて居ります。

中風は感冒、インフルエンザの軽いものと解しますが、然しチブスであつてもパラチブスの様なものは比較的軽い経過をとるものでありますから、兎に角病原菌といふものにこだ

はらないで、治癒機轉が起つてゐるかどうかで以て治療方針を決めます。

傷寒、五六日、中風、と書いてありますのは、傷寒或は中風で發病した後五六日を経てと解するがよろしい。此の傷寒中風の病氣に罹りまして、五六日経過致しますれば、寒い暑い感じが起つて來ます。胸の中が苦しくて、一向物を言はなくなつて、食物を喰べたがらない。心臓部の處が息切れて呼吸が苦しくなつて、ムカ／＼するといふ場合には、漢法では少陽の症と言つて居ります。大體漢法では、有熱性の傳染病を二つに分けて、陽と陰とに分けて居ります。

陽の場合には、太陽、少陽、陽明と稱し、陰の方を、太陰、少陰、厥陰(ケツチンと讀み習はして居ります)と分けておられます。陽といふのは、病氣が昂進して行く場合、つまり病氣の勢が激しい、鋭いと申しますか、病人の病氣に對する病的反應、生物反應が熾んであります。熱の少ないものは病氣の反應が微弱であります。同じチブスに罹りましても、壯健な者は普通チブス菌の反應で高熱を出します。ところが、身體が虚弱であるとか、或は亦病毒があまりにも強く來た場合には生物反應は強く起つて來ませぬ。非常にきつい病氣に罹つて居つても熱が出ないので、疫癘の如きものは、直ぐに太陰、少陰、厥陰に入つてしまふので、病氣になると手足が冷めなくなつて居ります。インフルエンザ、チブスで陽症の

ものは病的反應が著明で非常に熱を出して來るのであります。熱病に罹つて最初は、發熱、惡寒、頭項強痛、骨節疼痛、頭が痛み上記の症候が現はれて來ます。感冒や、チブスの初期に現れる症候は、太陽症に相當するのであります。その際脈は浮であります。即ち有熱性の脈であります。軽く押さへたときは指先に明らかに感じますが、壓力を加へますと消えてしまひます。浮のうちでも、中風の場合は脈は緩、即ちゆるくなり、有熱性の脈であつて、脈の打ち方が、緩慢であります。

少陽といふのは、往來寒熱、胸脇苦滿、默々として飲食を欲せず、等の症候複合を現はす状態を少陽であると申します。陽明は又次に申しますが、陽明の方は、大便が難で、汗が出て、惡寒はせず、惡熱、潮熱、譫語、秘結して、汗が手足から出てゐます。一寸手を握つて見ても汗ばんで居ります。患者は少しも寒がらない。惡熱と言つて、惡熱とは熱を惡むといふことでありまして、熱い感じのために苦しめられる、即ち患者は非常に暑い事を嫌つて、熱があるから出したらいけないと言つても、又しても手足を外に出してしまひます。暑がつて仕様がありません。斯様な病人がよくあります。例へば腹部に炎症のある病人に多い。例へば腹膜炎とか黄疽とかにはそういう傾向が多いのであります。チブスの熱は、勿論惡熱の方であります。潮熱は一定の時、一日中の一定時に、潮の



満ちる如く熱が出て来ます。今の學問の脉型からいっても潮熱は一定時に體温が上昇しますが、主觀的に患者がそう感じを訴へます。そういふ熱は、腹膜炎、腸熱、結核性の熱で、午前中は少くて、午後になると出て来ます。不大便、惡熱、言語等の症候を現はすのを陽明症といつて居ります。

さて少陽の症でありますが、今申上げた往來寒熱、胸脇苦満、黙々として飲食を欲せず、心煩喜嘔、或は胸中煩して嘔せず、或は渴し、或は腹中痛み、或は脇下痞硬、これは兩脇が固へて固くなりまして、食事をしましても此處の腹筋が硬くして固くなりまして、或は心下悸し、小便利せず、心窩部の處を押さへますと、動悸が高くなります。そして小便が余り出ないのです。或は渴せず、身に微熱あり、或は嘔する者は、小柴胡湯之主る。此の主るといふ事は、傷寒論に常に出て参りますが、主るといふのは、唯一無二の薬であるといふ意味であります。

藥味 柴胡半斤、黄芩三两、人参三两、半夏九升洗、甘草炙、生姜各三两切、大枣十二枚擘  
右七味 水一斗二升を以て六升を取つて滓を去つて再煎して三升を取り一升を温服すること日に三服

此の水の分量は十分の一でいゝわけでありませう。それから、惡寒といふのは、身體に寒い感じが表面に現はれて来ます。身體の外側が水をかけられた様な感じでありませう。

様に肝臟の働きが病的であれば神経症状が起つて来ます。そこで柴胡は、肝臟の働きを圓滿にして、同時に神経を鎮靜させる作用を持つてゐるのであります。

次に黄芩でありますが、これは味が苦くて寒性の薬で、柴胡を助けて解熱させます。そういふ意味の薬であります。次の人参と、甘草は、人體の中部の働きを助けて胃を開きます。胃部の働きを助けます。

漢法では人をして病ましめるものを邪と申します。邪は外から入つて来て、身體の中心部に到達する。即ち裏證に入るまでに相當かゝる。それが爲め、内部の方に邪が入るのを防ぐ、或はそれを追ひ出さうとするために、むかつきが起つて来ます、嘔氣であります。その嘔氣に半夏を用ひます。半夏は矢張柴胡と同じく性は温の薬であります。

生薑と大棗は、矢張甘であります。此の甘温の薬でもつて榮衛の働き、胃腸を調節するのが、大棗と生薑の働きであります、と斯様に解釋します。

小柴胡湯は應用の範圍の廣い薬であります。今申上げた様に應用するのは、そういふ有熱性の、急性の熱病の時に、今申し上げた症候の場合に、勿論これをやりますとすぐ症候はとれて来ます。

それから、マラリヤに此の小柴胡湯を使用するには、マラリヤは往來寒熱が激しいのですから、小柴胡湯に更に、草菓

す。皮膚の汗腺に粟粒が現はれて来ます。かやうに惡寒の症候はすべて身體の表相部に現はれて来ますから、惡寒を裏證と申します。頭痛も同様表證であります。

此れに對しまして、大便が出難く、惡熱のあるのは、裏證であります。身體の内面である處の大便が出難いので、惡熱は身體の中心部、即ち裏面に起つて来ます、といふのは、これは傷寒論だけの解釋で御座いますが、つまり身體の系統を分けますのに、内外に分けます。そして外を更に表面部即ち表と、内面部即ち裏と、かういふ風に分けます。裏證はつまり、表面部に於ける症候であつて、裏證は内部に現はれます。ですから往來寒熱は裏は表で熱は裏であるから半ばは表で半ばは裏であります。これを半表、半裏といふので半表半裏は少陽病の部位であります。

此の薬味のうちで、柴胡は矢張温性の薬でありまして、味は辛で、性は温であります。辛温の性質を持つて居つて、胸脇の部分の固くなつたのを、ゆるめる薬であります。又熱を下げる力もあります。俗に疳がたかぶるといふのは、神経症狀であります。この疳がたかぶるといふのは、肝臟の働きが悪いために、神経質になることでもあります。今の學問からいつても、肝臟内の新陳代謝作用の異常による代謝産物のため神経の働きを鈍らせたり、興奮させたりするので、つまり肝臟の働きが円滑でないので疳癩持ちが多いのであります。斯

葛粉、天花粉を加へます、以上で大變よくきます。

尙子供の肺門淋巴腺で微熱があつて、そして外に大した咳嗽も喀痰もなく、食慾がないといふ時、小柴胡湯を與へるのであります。いけなかつた場合にはかういふものを混ぜます。これは寒かつたり、暑くなつたり、熱が曲狀の時は、天花粉がよろしい。熱といつても單に微熱であつて下り難い時は、小柴胡湯に鼈甲を加へます。

それから小柴胡湯は、鼠溪部、陰部、かういふ處に皮膚病が出来ます、つまりいんきん、濕疹が健康の時の皮膚に出来します。又花柳病の様な病氣のある時、小柴胡湯を用ひます。その時は小柴胡湯に、連翹、蒼朮、青皮、疾疇子を加へてやります。これは私、度々經驗をして居ります。皮膚科へ通つても癒らないでゐる様な病氣によく効きます。重に小陰部の側部の内股から外の方にかけて出来る場合、或は又他へ出来ましても、小柴胡湯にこれだけ加へますとよく効きます。漢法では同じ濕疹と言つても、出来る場處によつて薬が大分異なります。西洋と大分考へ方が違ひます。同じ皮膚病でも、頭のくさは違ひます。くさの場合は小柴胡湯に、黄連解毒湯、これは黄連、黄芩、黄柏、山梔子、之を加へてゆきます。

扁桃腺、慢性の扁桃腺をやる子供は、咽喉を絶えず赤く爛らせる、かういふ子供にもよく効きます。それから、婦人が月經中に熱病に罹りますと、可成病氣が



重くなります。亦産褥の時、産褥熱によくかゝりますが、此の産褥熱の時に、小柴胡湯に、鮮地黄、生の地黄を加へます。そうしますと非常によく効きます。實に吃驚する程よく効きます。可成甚しい熱でもこれでとれて了ひます。

生の地黄は、道修町では余り賣つて居りませぬ。貯へて置きますのには、砂に入れておきます。

今申上げました様に、結核性の發熱の時は龍甲を加へ、更に寒朮を加へます。龍甲を加へてやりますと、結核性の熱がよく取れます。

それから熱病に罹りまして、小柴胡湯の症候即ち少陽の症の時で腦症を起して來ることが往々あります熱病で、肋膜炎の如き場合腦症を起して來ますと、小柴胡湯に、百合、知母、腦膜炎でもおこしそうな時は、竹筴、梗米、食鹽（荒鹽がよろしい）を一寸入れて、小柴胡湯に加へてやりますと癒つて來ます。

それから小柴胡湯の症候であつて下痢を起して來ます場合下痢を伴つた場合は、芍藥、川芎、蒼朮、陳皮を加へてやりますとよく止ります。

それから腹痛なんか起して來ます時にも、小柴胡湯はよく効きます。矢張どつちかといふと、陽明の症に近い場合、即ち腹膜炎らしい時には、小柴胡湯に、特に小柴胡湯のうちの人参を去りまして、枳實、芍藥、梔子を加へます。

そういう場合には小柴胡湯に、黃連、瓜蒌仁、半夏（半夏は小柴胡湯に含まれて居りますから）黃連と瓜蒌仁だけを加へます。此の黃連、瓜蒌仁、半夏は小陷胸湯でありますから、之と小柴胡湯と合したものを、柴陷湯と言つて居ります。胃腸の働きが鈍くて、食慾がなく、物事に倦み易くて、微熱が多少ある、そうでなくても、氣管支炎のために、痰を出すといふものなどに宜しい。それでよく柴陷湯を服みますと、彼奴あやしいといふ位であります。とにかく重寶な藥であります。それから此の少陽の症に、口苦、目眩、耳聾の症候が現はれて來ます。つまり、明るい處では物が見にくく、口は苦く、耳は聞えない。

風邪を引きましても、一寸寒氣がする程度でありますが、暫くしますと口が苦くて、そして特に此の風邪引きの時は口が苦いです。で病氣は少陽の症であります。小柴胡湯を加減してやります。

頭痛が甚だしければ、小柴胡湯に桂枝湯を加へます。口が苦くて心窩部が固くなり、熱は往來寒熱を現はして居ります。呼吸は多少即迫して、肺炎の初期の如き症候を呈して來ます。かやうな場合は、小柴胡湯から、人参と大棗を去りまして、枳實、桔梗、瓜蒌仁を加へて與へるのであります。之を柴胡枳桔湯と申します。肺炎の初期にこれを與へますとよく効きます。クループ性肺炎の時に、與へますとよく効くのであり

淋巴腺の腫脹を認める時は、莪朮を加へます。そして患者が熱を訴へる場合は、炎症を去る爲めに、黃連と百合を加へます、かういふやり方でやつて行きます。

よく婦人なんかには、俗にいふ血の道のために鼻血があまりすとか、頭痛を訴へるとか、眼が赤くて、耳が鳴つて、齒が絶えず痛みます。そういう患者は、小柴胡湯に、石膏を加へますとよく効きます。

それから婦人で、よく生殖器の病氣で、卵巢、子宮に病氣があつて、或はラツバ管の炎症で、下腹が痛みまして、嘔氣を催し、頭痛を訴へる場合などに、小柴胡湯に紅花を加へましてよく癒ります。

それから一體に、少陽症の人の舌を見ますと、白く霜をおいた様に、舌が白くなつて居りますのが普通であります。胃腸がわるくて、平生から舌に苔のあるものは別であります。平生は綺麗なんですのに、赤いのに霜をおいた様で御座います。舌が斯様に白くて兩脇がすつと痛んで、咳嗽も時々ある。そういう時に、小柴胡湯に、五味子、乾姜を加へますと、内部の血液の循環がよくなります。それから心窩部に苦痛を訴へ兩脇の右から下の方へ、季肋部へ重苦しくつかへて來る。おさへて見ると、胃液でタブン／＼と音がします。平生から胃腸が弱くて胃擴張なんかあつて胃の弱い人で、肋膜、肺炎又は氣管支炎のある場合には、よくかういふ症候であります。

ます。すぐ癒つてしまひます。

若し柴胡枳桔湯の症候複合であつて特に咳嗽だけ甚だしい時は柴胡枳桔湯に、青皮、杏仁を加へます。それを柴梗半夏湯と申します。肺炎の時咳嗽が激しくなかつたならば、柴胡枳桔湯を與へて、咳嗽が激しい時は、柴梗半夏湯をもつてゆきます。これを與へておきまして片方で、牛黃を與へます。これを一日二分から五分位與へます。そうしますと、大變良効を得ます。

それから結核の時、微熱があつて、そして身體が非常に衰弱してしまつて、瘦せて皮膚はカサ／＼に乾燥して、見るからに身體が乾ききつた様な患者があります。そういう場合は小柴胡湯に四物湯（藥味は、當歸、芍藥、川芎、地黄であります）を合してやりますと、患者の皮膚の乾燥がとれて來て、血液もだん／＼増して來まして、同時に身體が多少肥つて來ます。

それからこれは、例へば婦人のラツバ管炎とか、かういふ生殖器の疾患のため、腹痛を訴へて、痛みが兩脇に響きまして、熱が相當激しいといふ場合、或は盲腸炎でもあるまいかといふ様な場合には、小柴胡湯に桂枝湯を加へて、柴桂湯といひますが（此の桂枝湯は、桂枝、芍藥、甘草、大棗、生姜であります。ですから、桂枝と芍藥を加へるわけでありませぬ）之を與へます。



それから又應用と致しましては、此の柴桂湯であります。柴桂湯に大黃を加へます。月經不順で、月經なく困つて居る場合は、此の大黃を加へてやりますと月經が出て來ます。やつて見て居りまして、出なければ、又方法があります。

それから矢張、熱病に罹りまして、胸がつまり、小便が出難くて、言語を訴へ、身中が痛んで來ます。そして起居が不安になります。かういふ症候が伴つて來ましたならば、小柴胡湯より黃芩、甘草を去りまして桂枝、茯苓、龍骨、牡蠣大黃を加へて與へますとよく効きます。これを、柴胡龍骨牡蠣湯と言つて居ります。これはつまり、腦症を起した時の藥でありまして、これを應用しまして氣狂に用ひます。躁鬱病は精神病であります。そしてかゝる状態を繰返して死んで了ふのであります。それで躁鬱時には、柴胡龍骨牡蠣湯をやりますと静まつてしまひます。

神經衰弱で催眠藥を服んでも眠れない時、鎮靜劑として用ひますとよく効きます。漢方研究家の中山さんは不老長壽藥と言つて居りますが、そういふ意味はないが、神經衰弱の藥によいのであります。藥味を見ましても矢張神經劑であります。

### (二十一) 大柴胡湯 (ダイサイコタウ)

太陽病、過經十餘日、反二三之を下し、後四五日柴胡證仍在者、先づ小柴胡を與ふ。嘔止まず心下急、鬱々として微煩する者は未だ解せずとなすなり、大柴胡湯を與へて之を下せば則ち癒ゆ。

- 柴胡半斤
- 黃芩三兩
- 芍藥二兩
- 半夏半斤洗
- 生薑五兩切
- 枳實四枚炙
- 大棗十二枚擘
- 大黃二兩

右八味水一斗二升を以て煮て六升を取り、滓を去つて再煎して一升を温服すること日に三服

(以上テキスト)

太陽病では、發汗すべきであるのに、治療方針に反して、十餘日を経て、二三回之を下し、法則に反して之を下す。發汗させるべきであるのに下して居る。下したる後四五日經過しても症候が尙存在するものは、小柴胡湯を與へまして、それでも尙ほ嘔氣止まず、心下急、鬱々として微煩するのは病氣が未だ癒らないのであります。そういふ場合は、大柴胡湯

これも一種神經症で、手足が絶えず吊る病氣があります。筋張つて來ます。手足が硬直して來る神經症であります。胃腸患者にもあります。神經で手足が硬ばつて、起居が不自由になつて來ます。そういふ患者は、柴胡龍骨牡蠣湯に更に芍藥(芍藥は非常によいもので、硬直をゆるめます)羚羊、釣藤を加へますと、同じく硬直がゆるんで來ます。本當の羚羊は手に入らないですが、羚羊を加へます。

それから瘰癧、淋巴腺腫であります。淋巴腺腫、特に婦人が瘰癧をやつた場合には小柴胡湯に、牡丹皮、山梔子を加へて、結核性の淋巴腺炎で月經不順になつて居ります婦人に特に用ひます。之を加味小柴胡湯といひます。加味小柴胡湯を與へますと、熱も下りまして、塊り即ち淋巴腺腫もとれて來ます。月經もだん／＼出て來ます。まあかういふ良い結果を見ることが出来ます。

小柴胡湯の應用範圍は仲々ひろいので、これを自由に使用こなせますと、可成の病氣に當りましてもよく治すことが出來ます。でこれは一先づこれ位に致しまして、その次の大柴胡湯であります。

を與へて之を下せばよろしい。大柴胡湯は、小腸の藥であります。心下急、鬱々として、微煩する者、といふのが大柴胡湯の目當であります。藥味は

- 柴胡半斤、黃芩三兩、芍藥二兩、半夏半斤洗、生薑五兩切
- 枳實四枚炙、大棗十二枚擘、太黃二兩
- 右八味水一斗二升を以て煮て六升を取り、滓を去つて再煎して一升を温服すること日に三服
- 大黃がなかつたならば、大柴胡湯の意味をなさないのであります。

寒熱往來は半表半裏の證であります。大便が出難い、大便が硬いといふ風なものは、即ち病裏に入つて、陽明の症に移るわけでありまして、腸の炎症でそういふ事になります。それを去るために、大便をおし上げてしまふ、そういふ意味の藥であります。

芍藥は、腸内の硬直をゆるめます。半夏は前申上げた通りに嘔氣を止める、大棗も嘔氣を調和する、かういふ意味の藥であります。

大柴胡湯は、大便が出難くて咽喉が悶えて苦しい、胃の處が非常に張つて苦しい、そういふ場合を目當として用ひます。鬱々として微煩する、物が鬱積した感じで、精神が落つかない、昂奮状態であります。そういふ昂奮状態を、大柴胡湯は鎮靜させる事が出來ます。俗に感情の、所謂肝癩玉のつよい



人、消化器病が原因で神経衰弱になつてゐる人、即ち胃腸が悪い爲に、肝臓の強い人で、氣が焦々して居る人に、大柴胡湯をやりますとよく効きます。

大柴胡湯は氣を順らすもので、更に之に香附子、甘草を加へてやります。これだけで治らない時は、更に釣藤、羚羊、黃連を加へてやります。そうしますと、普設一寸一見して病氣らしくないが、中年位になりますと、神經を種々と使ふ時に用ひますと、神經の消耗を治すことが出来ます。で一種の神經の強壯藥になるわけです。中年の人が活動して、神經が高くて眠れないが、外へ出れば圓滿に社交をやつて行かねばならないため内では家族に當り散す、そういう神經のいら立つのを鎮靜させる、一種の鎮靜壯藥に用ひられます。

次に昔の人は、肝臓に病氣がついたために、半身不隨、即ち中風が起りますと、そういう風に解したのであります。これも鬱血さへ取れば中風は治るといふ考へ方で、大柴胡湯を中風に用ひますと恢復が早いのであります。

それから胃腸病患者で、心窩部と臍との間を觸診しますと塊がふれて、兩側の腹筋が硬變して居ります。之を壓しますと痛がります。そしてかういふ人は大便が出難くて、左の腸骨高に大便が溜つて居ります。こんなのは矢張胃腸から來た神經衰弱であります。感情が露骨に現はれて、嬉しい時には馬鹿に嬉しいが、一面において怒りつぱいのであります。大便が快通しないのですが、大柴胡湯をやりますと、非常によ

くなつて來ます。

それから黃疸の時は、心下痞硬と申しまして、心窩部がつかへて硬くなる。大柴胡湯に茵陳を加へます。又、黃疸を加へますと、患者を満足させて感謝されるのであります。

それから蛔蟲が寄生した場合であります。今は蛔蟲は、斯ういふ字を書きますが、昔は虺虫と書きました。蛔蟲が寄生した時は、大柴胡湯に、胡胡菜(海人草のことです)を加へてやりますと効果が多いのであります。

それから、大柴胡湯の症で、熱病なんかで臍が現はれて來る時は、黃連と山梔子を加へてやります。それから夏季に發熱して、胃腸の熱らしいと思はれて居る場合は咽喉を渴かして患者は苦しみます。そういう時には、これに麥門冬、知母、石膏を加へてやりますと、間もなく下熱してしまします。

次に發疹性の熱病であります。それには大柴胡湯に、鮮地黄、玄參、牡丹皮を加へますとよいのであります。多少熱があつて發疹する場合には、これを用ひますとよく効くのですが、癩疹なんかにはこれを用ひません。

又鼻血が止まらない場合外にも方法はありますが、鼻血には大柴胡湯に、犀角を加へてやるとよろしいのであります。それから大柴胡湯を用ひしても、便通がなくて、尙胃部の處に苦痛を訴へる場合は、大柴胡湯に、芒硝を加へてやりますと通じます。これを特に柴胡湯加芒硝湯と言つて居ります。

### (二十二) 大承氣湯 (タイシヨウキタウ)

陽明病 脈遲汗出づと雖も惡寒せざる者は其身必ず重く、短氣腹滿して喘し潮熱ある者は此れ外解せんと欲す、裏を攻むべきなり。手足濇然として汗出づる者は此れ大便已に鞭し大承氣湯之を主る若し汗多く微し發熱惡寒する者は外未だ解せざるなり。其熱潮せずば未だ承氣湯を與ふべからず。若し腹大に滿し通せざる者は小承氣湯を與て微しく胃氣を和すべし、大に泄下するに至る勿れ。

大黃 四兩酒洗

厚朴 半斤炙去皮

枳實 五枚炙

芒硝 三合

右四味水一斗を以て先づ二物を煮て五升を取り滓を去つて大黃を内れ、更に煮て二升を取り滓を去つて芒硝を内れ、更に微火上せ一兩沸して分温再服す。下を得ば餘は服す勿れ。

(以上テキキスト森田博士朗讀)

此の大承氣湯を與へる場合は、此處に書いてあります通りに、汗出づと雖も惡寒せず、とありますが、惡寒は表症でありまして、惡寒がしなくなつて汗がジト／＼出るのは、病が裏症に入つたわけでありませぬ。

腹中が充満してゐるために呼吸が短速となつてくるので、短息は喘息の様態であります。熱は一定時に潮の満ちる如く出て來ます。そういう微候が現はれる時は、病が裏に入つて居るわけでありませぬ。

そういう時は、胃腸に熱を持つてゐるのですから、その胃腸の熱のために、大便が固くなつて來るので、通じが困難になります。そういう場合は、大承氣湯を與へます。

「手足濇然として汗出づる者は、此れ大便已に鞭し、大承氣湯之を主る」とあるのが、つまりかういふわけでありませぬ。大便が出難くなつて、そして手足から汗が出て、それから寒けがなくなつてしまふ。そういう時の腹部を見ますと、腹部に矢張硬結があります。臍の周圍の處に、石を袋に入れて上から觸れる様な感じであります。固いものに觸ります。それは宿便と申しますか、大便が硬くなつて居るのであります。これが甚しくなりますと、熱がだん／＼高くなつて、潮の



如くジリ／＼と押し寄せて来るのであります。潮熱が甚しくなりますと、精神症状が現はれて来まして、言語を發して來ます。うわごとであります。患者はうわごとをいふ様にけりります。手足をバタ／＼床の外へ出して苦悶します。そういふ時、人が側へ行つてもよく判らない。そして漢法で言ひます處の、循衣摸床、即ち衣を撫で床をさぐるといふことをやる。即ち醫者が側へ参りますと、醫者の着物を掴んで撫でます。又、牀をなでまはしたりします。手でそこいらをウジヤ／＼やります。

わけが判らないが、時々ビタ／＼します。それは腦症を起して居りますのであつて、眼珠は硬直してしまつて、一箇所をみつめて動かない。それは高熱のためにかういふ症状が昂じて來て居るのであります。

大承氣湯で排便を促せば、右の症状は取れて來ます。ところが此の場合、非常に注意を要する事は、脈に力があれば、大承氣湯で下しますが、不整の場合には餘程注意をしないと此のために虚脱の症状を起します。そういふ場合には、升陽散火湯といふものを使ひます。

脈に力のあるかないかは、掌を反すが如く、ホンの一步の遠ひでありますから、一寸危ないと思つた時は、升陽散火湯を用ひます。これは、人参、當歸、芍藥、黄芩、麥門冬、白朮、柴胡、陳皮、茯苓、甘草、生姜、これだけの藥味が入つ

て居ります。これを用ひます。そうしますと、大承氣湯の危險をさける事が出來ます。

よく彼の産後に、出血が甚しくて、その爲に言語を現はす場合がありますが、かういふのは陶語と申します。言語はうわごとであります。言語は陽症の場合でありますけれど、陰症の場合には陶語を現はします。陶語の方は、言ふ事に力がない。言語の方は、大きい聲で力が十分あります。陶語は力がありませんから、大承氣湯を用ひられない。そういふ時は參附湯附子とそして朝鮮人参の極く上等なものを用ひまして服ませます。

これらは、非常に臨床さむづかしい處でありまして、大承氣湯を用ひるべきか、或は升陽散火湯にすべきか、參附湯を用ひるか、一步を誤れば取返しがつかない處であります。ともかく經驗をつまねば、使ひこなせないものであります。

大承氣湯の、此の承といふ字はしたがへるとか、安ずるとかいふ意味でありまして、従つて承氣は、順氣、氣を順がへる、氣の凝りを解くといふ意味であります。お腹の中に物が澤山溜つて來ると、氣が結ばれて、氣がつまつて來ます。その氣の結ばれを解くといふ意味が、承氣の意味であります。氣が充奮して精神症状に現はしてくる場合、例へば俗にいふ、燥鬱病、これはマニヤとメラソコリー、即ち發揚状態と沈靜状態の場合とが交替に起つて來る精神病であります。

この燥鬱病の燥症の時に、大承氣湯に、當歸を加へて與へますと、騒ぐのを止める事が出來ます。更に又、どうしても夜

寝られないで、昂奮して困る場合、神經衰弱の昂じた場合、便通がなくて夜寝まれないといふ場合には、大承氣湯に、當歸を加へて用ひますと、非常によく効きます。

それから、偏頭痛、頭の片方だけ痛む場合、偏頭痛と言ひますが、偏頭痛で大便の通じがなくて、宿便が溜つて居る様

な場合、便通がなくて偏頭痛を起して居る時に、大承氣湯を用ひますと、偏頭痛は癒つてしまひます。

それから、此の疣痔でありますが、痔核と言ひます。此の疣痔の痛みが甚しくて、時々出血があります様な場合、矢張大承氣湯に、乳香を加へて與へます。

大承氣湯は、其の位に致しまして、その次の小承氣湯であります。其處に書いて御座います通り、

### (二十二) 小承氣湯 (ショウシヨウキタウ)

大黃 四兩

厚朴 二兩炙去皮

枳實 三枚大者炙

右三味水四升を以て煮て一升二合を取り、滓を去つて分温二服す。初め湯を服せば當に更衣すべし、爾らざる者は盡く之を飲む。若し更衣する者は之を服す勿れ。  
(以上テキスト朗讀)

表症がとれなくて、潮熱を現はして居らぬ時は、承氣湯は與へられない。その時、お腹を手で揉んで見て、お腹が張つて來て、大便が通じない時は、大承氣湯は與へられないので、すから、小承氣湯を與へて見て、便通を加減して見ます。

小承氣湯は、大承氣湯に比して、排泄の力が少ない。柔かい作用であり、緩和な作用を現はします。大承氣湯を與へます前に、表症がありますかどうか、小承氣湯で小手調べをやります。

小承氣湯の藥味は、芒硝が一味ない爲めに、大承氣湯に比べまして、その働き方が緩和なのであります。その次は桃核承氣湯であります。



(二十四) 桃核承氣湯 (トウカクシヨウキタウ)

太陽病解せず、熱膀胱に結し、其人狂の如く血自ら下る、下る者は愈ゆ、其外解せざる者は尙ほ攻むべからず。當に先づ其外を解すべし。外解し已んで但少腹急結する者は乃ち之を攻むべし、桃核承氣湯によるし。

桃仁 五十箇去皮尖

大黃 四兩

桂枝 二兩去皮

甘草 二兩炙

芒硝 二兩

右五味水七升を以て煮て二升半を取り滓を去つて芒硝を内れ、更に火に上せ微沸して火を下し、食に先つて五合を温服すること日に三服、當に微利すべし。(以上テキスト朗讀)

膀胱と言ふ意味は、現代の解剖學上で言ふ處の膀胱ではなくて、膀胱である場合もありますし、子宮である場合もあります。それから肛門である場合もあります。兎に角、下腹部に炎症があつて、その爲めに、腦症を起して來て、尿道とか

或は子宮、肛門から、出血するといふ場合に、桃核承氣湯を用ひます。

その内の、桃仁と言ふものは、破血劑であつて、炎症を去る力の強いものであります。炎症を去つて、同時に鬱血を去つて、血液の循環をよくします。

これが應用としましては、急性の熱病の場合に、鼻血を出す事があります。衄血であります。また俗にのぼせるために衄血を出すことがあります。是等の時には、桃核承氣湯をやります。チフスなどで、熱のために腦症が起きて譫語し、時とすると黒色の大便を出し、つまり腸出血でありますね、腸出血がある場合によく効きます。又、小便を何回も何回も催出して血液を混じて來る時は、桃核承氣湯を用ひますと、出血が止ります。

陰症、虚症の場合は、用ひられないのでありますが、陽症或は實症の場合であれば、著効があります。

脈によつて陰陽を分けて、此の桃核承氣湯を用ひます。熱病であつて、血便を出して、そしてお腹の方へすぐ迫つて來る、珈琲様の或は漆様の大便を出す時に、やはり桃核承氣湯で下すと、血便は二三包で止ります。

ういふ患者には、桃核承氣湯を持つて行つてやりますと、痛みは止つて次第に血色も良くなります。

それから、此の瘍疽、瘰癧、天然痘ですが、此頃は天然痘と言つても、甚しいものは見ないですけど、瘍なんが出来まして、化膿がうまく出来ないで、敗血症を起さうとする。瘰癧の時、内攻しやうとする場合に、よく脈症を考へてやりました、この桃核承氣湯を用ひますと、意外の効果を奏します場合が多々あります。

それから、淋病で血尿を出す場合に、非常な痛みのために矢張腦症を起して來る如き時にも、桃核承氣湯がよく効きます。結核性の膀胱カタルで、血尿を出す場合に、患者の病氣が虚症になつて陰症に落入つてゐますから、かやうなきつい薬は駄目でして他の補劑を用ひねばなりません、淋病であると、これによつてよく血尿が止つて來ます。

又産後に後産がうまく出なくて、胎盤は出ましたが、その後不淨のものがすつかり出ないために、腹痛を起して來る場合は、桃核承氣湯でもつて、血液の循環を促します。そうすると血液の循環がよくなります。胎盤がいつまでも出ない場合は、桃核承氣湯に酒を加へます。日本酒を加へますと、少しづつ出て來ます。

それから、打撲を受けたとか、落馬したとか、階段から落ちて腰を打つた時とか、又は古い打撲傷のために腿が痛みま

それから、やはり普通に熱も何もなくて、衄血が熾に出てどうしても止まらない、といふ様な時があります。これは餘談であります、これも私が十三に居りました時に、大工の棟梁で衄血を出して止まらない。耳鼻喉科の先生が來られて、局所に治療をして居られたが止まらない。プク／＼口中に血が溜つて來る。可成多量の血をガブ／＼出して居る。明日の朝迄此の状態が続いたら、死んでまふだらうと思はれたが、手の施し様がなかつた時に、私が桃核承氣湯をやりました處が、すぐその甚しい衄血がとまりました。西洋の方では、局所の血管を收縮させて止め様とするが、漢法では、上に昇つて來る血を、下へ引き下げてやる。桃核承氣湯で、つまり引き下げてやりましたから、すぐ止つてしまひました。

それから非常に精神を使ひ神經を使ひすぎたために、氣が滯つて血行が悪くなりまして、つまり血液の循環が悪くなつて來る事を、漢法では血積と言ひます。かういふ場合には、矢張その人の顔色の血色が悪く、身體は衰弱して來る、食慾は少ないし、絶えず胸が詰つた感じがします。顔色が蒼白で、身體は瘦せて、食慾がなく、胸の中は物が詰つた感じであります。それで少々の食物を攝りましても、すぐお腹一杯になります。そして鳩尾の處が痛んで來ます。その痛みは同じ處が絶えず痛みます。脈は、矢張細微と申しまして、小さくて微なる場合が多いのであります。或は虚滿を起して來ます。そ



す様な時とか、或は月経がないために起る腰の痛みを訴へる  
そういふのは、瘀血に依る腰痛であります、桃核承氣湯を  
用ひますと、非常によく效きます。瘀血の痛みといふのは、  
晝間は著明でなくて、夜が特に痛みを強く感じます。そうい  
ふ場合は、瘀血の痛みと申します。それから、齒の痛み、齒  
痛ですね、齒痛で永年色々やつても止らない時、桃核承氣湯

を丸薬にして與へますと、齒痛が止ります。  
それから、矢張急に何か衝動を起して、嘔氣がして昂奮状  
態に陥つて、氣狂ひの様に暴れまはる時は、桃核承氣湯に、  
荊芥を加へて與へますと、直ぐに治まります。  
その次の調胃承氣湯に移ります。

七〇

### (二十五) 調胃承氣湯 (チヨウ井シヨウキタウ)

太陽陽明、惡寒せずして惡熱し、大便秘結、譫語  
して嘔し、日晡潮熱する者之を主る。

芒硝 半升

甘草 二兩炙

大黃 四兩去皮清酒洗

右三味水三升を以て煮て一升を取り、滓を去つて

芒硝を内れ更に煮て兩沸し頓服す。

(以上テキスト朗讀)

これは調胃承氣湯で、惡寒せずして惡熱し、熱の爲に非常  
に苦しむ。患者はあつい／＼と言つて居りますが、手足を觸  
つて見ても左程熱くはないのに、患者は暑がつて夜具を被せ  
てやつても、蒲團の外に手足を出してしまひます。そういふ

のを惡熱と言ひます。  
大承氣湯に行くまでに、大承氣湯ほど症候が著明にならな  
い時に用ひます薬であります。  
そこで此の應用であります。これは矢張走り廻る氣狂、  
發揚状態が強くて暴れ廻る、色んな事を口誦んで暴れ廻る。  
そういふ患者に、調胃承氣湯に、當歸を加へて與へます。  
それから、齒齦炎で齒莖が腫れて痛みます。此の齒齦炎の  
場合には、調胃承氣湯に、黃連を加へます。それをやりま  
すと、齒齦炎は治ります。  
それから、胃腸のわるい爲に、お腹の中があつくなくて困  
る、火が燃えて居る様に感ずる。又、腹痛を感ずるにしまし  
ても、冷え／＼する様な感じと、火が燃える様に感ずると

ありますが、後者を特に積熱と申しますが、この積熱の時に  
調胃承氣湯で便痛をつけますとよろしいのであります。

以上で、前回の残りを終へることゝ致しまして、次に

中風の事でありませんが、これをやりかけますと、長くなり  
ますから後にしまして、王先生に代つて頂きます。私も薬の  
實際の使ひ方を色々お話したのであります。一人で致し  
ますとやり切れません。然るに幸ひ王先生は上海の漢法醫學  
校を出られて、その方面の造詣の深い方であります。此の方  
に、薬の使用法、薬をそのまゝ使ひます場合もありませんが、  
或は色々修製して使ひます場合もあります。その方法を此處  
でお話して頂く事に致しまして、更にこれから關西にゐられ  
る漢法研究家に勧誘して、此處で話して頂きます。變つた  
経験、實際上の事に就いてお話しして頂く様に、計畫を奨めて  
居ります。左様に致しまして、私の足りない處を補はして頂  
きたいと存じて居ります。



400  
392

昭和十五年一月廿五日 印刷  
昭和十五年二月一日 發行

漢法醫學講演集(第二卷)  
特價 金參圓也

編輯兼  
發行人

田

口

靖

印刷人

高

坂

宇吉

印刷所

盛

進

堂印刷所

大阪市北區鶴野町一二  
電話農崎二七一六番

發行所

漢法醫學研究會

木曜會

大阪市東區川島町一丁目二六  
電話口廣大田七四〇六二番



終

